家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

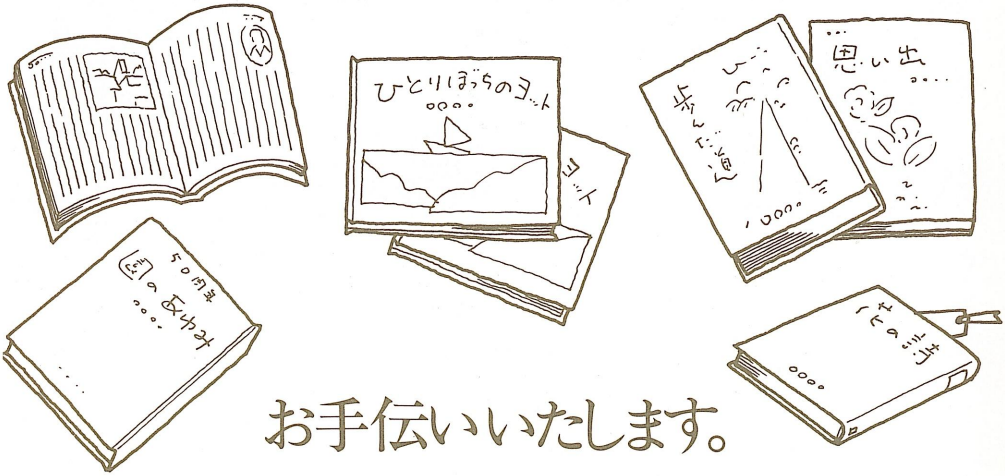
3

第八十四巻　第三号　日本幼稚園協会

記念の本づくりを

自費出版

なさいませんか。



お手伝いいたします。

- 内容、装幀、部数など思いどおりになる自費出版。手間のかかる編集作業は、キンダーブックや優良保育図書、雑誌などを手がけてきたプロの編集者がすべてお手伝いいたします。
- お気軽にご相談ください。
- 完成したご本については、小社の宣伝ルートを通して全国にご紹介いたします。

1．**本の内容は**…… 自叙伝、童話集、絵本、園の記念誌、研究集録、随想集、作品集など、ご随意に。

2．**製作部数は**…… 1,000部以上がお得ですが少部数でもお受け致します。

3．**製作期間は**…… 原稿頂戴から完成まで、約3か月見てください。

4．**本の大きさや体裁は**……大きさはB6判、B5判、A5判など。製本は、上製本から並製本カバーつきまで各種あります。お好みのままに。また表紙などはご希望のセンスを尊重してご相談に応じます。

5．**本文は**……原稿用紙に書かれたものでも、テープに吹きこまれたものでも、結構です。綺麗でわかりやすい組み方にいたします。

6．**絵や写真は**…… もちろん結構です。カラーのご相談にも応じます。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
ブレーベル館 記念の本づくり係 〒101 東京都千代田区神田小川町3-1
TEL 03－292－7788

（ご連絡はお近くの小社代理店・事業所にどうぞ。）

幼児の教育

第八十四巻　第三号

幼児の教育　目次

――第八十四巻　三月号――

珍竹林を育てる話……河合雅雄…(4)

☆病気と子ども

「なれっこ」一考……村田修子…(7)

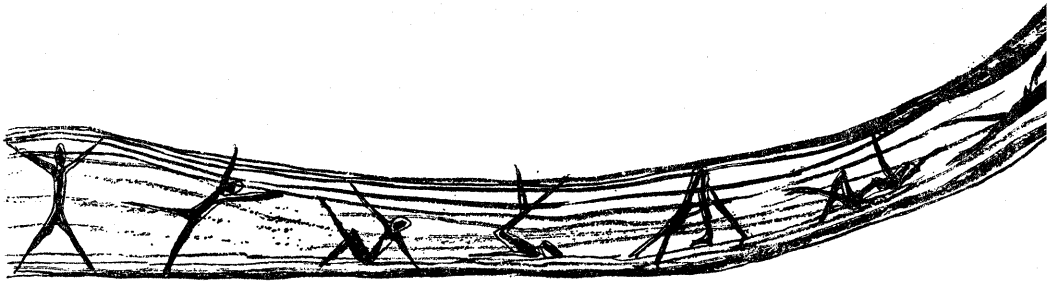
子どもの手術で思うこと……木村民子…(11)

窓口すずめの思うこと……天川みな子…(16)

子どもの病気と成長と……塚田幸子…(21)

ギリシャの小さな幼稚園での二年間……大多和檀…(26)

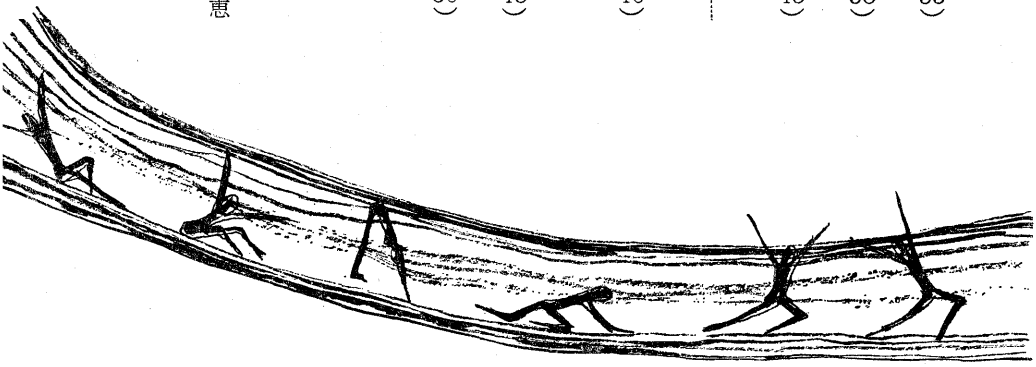
© 1985
日本幼稚園協会



兎園随筆　⑦……蕪木寿江…(33)
ヒグマの子育て……前田菜穂子…(38)
保育実習ノートから③……(43)

子どもたちのこと①……大橋利恵子…(46)
宗教人類学からみた子ども④
——感覚の話——……関　一敏…(48)
近代短歌に現われた子ども(二十三)……大塚雅彦…(56)

カット・福田　理恵

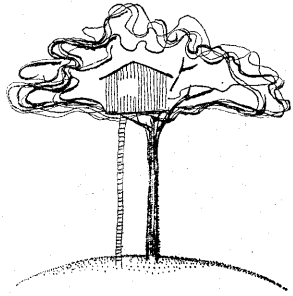


珍竹林を育てる話

河合雅雄

キンメイチク（金明竹）という竹がある。稈（かん。竹の茎のこと）に黄金色の縞模様が入った珍しい竹である。地の青に縦縞が入ったものや、節ごとに青と黄金色が交互に現れるという不思議な稈をもったものもある。こういう竹藪の中に入ると、貴品のある美しさに思わず立ちつくしてしまうだろう。

キンメイチクは、マダケの突然変異である。石川県にあるものは、葉っぱまでが黄色がかっていて、匂い立つ若竹のようなあでやかさがあり、天然記念物に指定されている。ところが、一斉開花による枯死の危機に見舞われた。マダケは周期一二〇年で、全世界の竹がほとんど同時に花を咲かせ、結実した後一斉に枯死する。日本から移植されたマダケは、イングランドやソ連でも、同時に開花結実し、一斉枯死した。



これは遺伝子にプログラムされた体内時計の仕掛

によるものだが、天然記念物の黄金の竹も、種の運命に従ったのである。

文化財担当者は仰天し、移植したり客土を入れたりして、恢復に懸命の努力を行った。客土した所の竹は恢復して筍が出てきたが、皮が落ちると凡庸な青竹ばかりが姿を現し、黄金の竹は消え失せていた。

その中で、ただ一本だけキンメイチクが発見され、移植して大事に育てられて十数稈に増加した。ところが、最近繁殖が思わしくなく、元気がない。どうすればいいだろう、という話題が天然記念物保護審議会に提出された。

「手入れをするから、だめなんですよ」

植物生態学のN博士が、にこにこしながら一発できめつけられた。

「草をぬいたんでっしゃろ。そんなことしたら、すぐ枯れまっせ」

アンギラスの異名をもつ博識のS林学博士が、追いうちをかけた。

つまり、大事にしすぎるあまりに、除草をして肥料を与えたのがいけない、というのである。原産地が青竹林になったのも、客土を入れて施肥をしたのが原因だという。

キンメイチクという珍種は、虚弱体質なので、肥料を与えすぎるとうけつけることができず、返ってだめになる。雑草は竹の養分を横取りするから除いた方がいいと考えがちだが、強い日光から根を守り、水の蒸散を防ぎ、有用な土壌動物の保護に役立っているから、除草すると竹は弱ってしまうのである。

「過保護はいけません」「自然のままがいいんです。放っとくことですなあ」委員の先生は口々にそう言ってるうちに、いつしか教育談議になった。過度な人工環境の中におかれ、「内なる自然」を抑圧されている子どもたちの教育に、雑草の大切さを教えてくれる。今の教育は、雑草の除去に熱心すぎてるか

らだ。

「珍竹林を育てるように子どもを育てんと、ちんちくりんな子ができますよ」と私はつぶやき、「そのうち、子どもたちは一斉にしぼんだ花を咲かせ、一斉枯死しまっせ」と脅しをかけた。「ほんまにせやねん」と、アンギラス先生は苦笑いをして虚空を睨まれた。

これに類した話が、もう一つあった。徳島県山川町にヲンツツジの自然群落がある。樹齢数百年、高さ六メートルに及ぶツツジが、約五ヘクタールもの面積に群生している。開花時の写真を見ると、桜の林かと見まがうばかりの豊麗さに輝いていた。

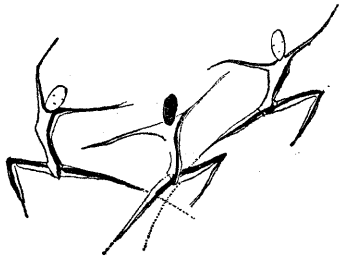
地元の人が保存しようとして、大木になるカエデを伐り、アセビを引きぬいた。ところが、その後にカヤなどが茂ってヲンツツジが圧迫され、衰弱しはじめたというのである。

珍竹林の賢人たちによると、やはり「いらんことをするから、だめになる」のだそうである。ヲンツツジは岩地に生えているので、カエデなどは放っておいても大きくなりっこはない。また、アセビは根から有毒物質を出し（アレロパシーという）、カヤなどの有害植物の繁茂を防いでくれている。だから、アセビは除去をしてはいけないのである。

また、がやがやと雑談に花が咲いた。「わしら、子どものときは悪いことばかりしましたぜ」とS博士。「毒も必要ですね」端正で行儀のよいY先生が、にこりともせずおっしゃる。みんな、味のある毒を発散しながら、自分も周囲も見事に育ててきた、ということなのだろう。その故か、みなさん天然記念物のような立派な顔をしてらっしゃると、無毒蛇の私は己の顔の貧しさを恥じたのであった。

（京都大学霊長類研究所）

「なれっこ」一考



村田修子

「健康」ということに関して、自分の場合でも普段は余り意識して過していないように思います。まして若いときはもっともっと気にしていませんでした。そのときはいろいろなことで忙しかったり、総て前向きに進んでいる時期ですから当然といえば当然のことなのでしょう。いい替えれば、「気にしないで過していられる」ということはとても幸せなことなのですから、この当り前のことに対して感謝すべきなのでしょう。

「病気にかゝらない」「からだのためによい」ということには各種類のことがあります。栄養のこと、カロリーのことなどは、「食べる」という生きるための絶対的必要性から積極的に取り上げられていますけれども、このように普段なにげなく習慣的にしていることの中に、改めて考えてみますと、とても大切なことがたくさんあるように思います。

以前に次のような経験をしました。或る父兄が、「子供のことで一番注意しているのは排泄のことです。どういうのが出たのかを言わせるようにしています。そうすれば大体の健康状態が分るからです。」この父親は別に医学に関係のある方ではありませんでしたが、よい意味で合理的な生活態度の方であったと思っています。どの親でも気にしているに違いないことなのですが、私が感心した点は、父親が関心を持ったポイント、そこで子供とのつながりを持っている、ということです。このような当り前のことをとり立てて感心する社会の変りようを改めて考えてしまった事でもありました。

また、余り意識していないことの一つに、「酸素を呼吸している」ということがあります。

二年程前に母が肺炎になったときに経験したことですけれども、呼吸が困難になったとき、その行動、言動は全く普段のそれとは違いました。肺が炎症を起したので酸素の供給が十分にいかなかったための症状なのです。

余り馴れっこになっているので、特別な事として考えたことがないので、事実として見せつけられでもしないと忘れ勝ちになってしまいます。それにつけても世界で唯一つ残っているアマゾン流域の大自然林の破壊寸前のニュースは、本当のところ身近な危機感として迫ってはこないのですけれども、矢張り大変な事なのだ、と心配にはなります。私もときどき何かで知った大きく息を吸うことをやってみます。鼻先きだけで軽く吸うのでなく、肺の隅々にも十分に吸気をゆき渡らせて、その機能を完全に目覚めさせる、というようなつもりで静かにゆっくり吸い、そして又なるべく長いときをかけて吐くのです。そうすることがどういうことのためによい、ということよりも、私は呼吸していることを意識し、肺の総ての細胞に酸素がゆき渡った、という感じを味わってみるのです。思ったよりずっとたくさん空気が吸えて驚きます。

もう一つ「物を食べる」という基本的なことの役割りをもっている歯についても、物を口に入れればたいてい

の場合は意識しないでも、「噛み砕く」という活動を始めてくれますし、適当になると舌がのどの方へ押しやって飲み込ませてくれます。これなどもいちいち意識していたら人間自体が疲れ果ててしまうでしょう。本当にうまく出来ているものです。

ところが最近聞いた話しによりますと、その大切な面が基本となる数を揃えるだけの場所を失った、というのです。それは台となるべきあごが正常の発達をしないために出る場所がなく、二重に生えてしまったり、欠ける、という現象が起ってきているのだそうです。なぜそうなるのかといいますと、小さい頃に余り自分で物を噛み切ったり砕いたりしないで、親が口に入れ易いようにこまかく切ってくれたものを容易に食べているからです。親が心を届かせたつもりが思わぬ逆な結果を生んでいます。マンロー・リーフ作、『おっとあぶない』（学研）の本のいい方で言えば、「気をきかせまぬけ」が私の周りにもたくさん居りますから、それの恐ろしさを聞かせて上げようと思っています。

なお、口の中の清潔さを保って虫歯になるのを防ぐために、と思っていた「歯を磨く」ことについても、最近歯医者さんに次のような事を伺いましたので、これもまた幼いときから身につくように指導しなければならないと痛切に思いました。

それは、よく歯石がたまった、ということを耳にします。その歯石が大変なくせ者で、単にそれが歯ぐきとの境についた、というそれだけのことではなく、そのもとで大変な害をしているのだそうです。

口の中には好気（こうき）（空気を好む）のばい菌と空気を好まない嫌気（けんき）のばい菌があって、好気のそれはまあ悪者の中でも善玉で、嫌気のそれは全くの悪玉なのだそうです。その悪玉は空気が嫌いなのですから歯石の下の空気のさえぎられたところでは大活躍し、歯ぐきを犯すことは勿論、それだけに留まらず身体の中、内臓にまで悪い影響を与えていくのだそうです。内臓が犯される、となると一大事です。磨き方、用具などはいろいろな論があるようですが、大切なことは、「食べたら三分は磨く」です。

園では家庭よりも案外やり易いように思いますので、是非習慣化したいと思っています。

私も長い間、子供に接してこられたことは、先ず健康であったからです。――といってもその間、三、四回割に大きな病気を経験しました。それでも若い時は、これで立てなくなるのでは……等とはつゆ程も思いませんでした。思わなかったからこそ、恢復を待って再び子供たちと喜々として生活できました。けれども、身近にいる年を重ねた人や、たまたま行った病院などで見かける多くの年老いた人の状況は、いやでも他人の事とばかり思っていられない気がします。

けれども以前病気をしたあと、クラスの子供の病欠の届けなどを聞くと、それに対する自分のおもいが、前とは違ったことを感じたことからしますと、病気という経験もまたいろいろなことを教えてくれる一機会だと思えるのです。でも、すこやかに過せるにこしたことはありませんけれども……。（お茶の水女子大学附属幼稚園）

定価改訂のおしらせ

誠に不本意でございますが、本誌の定価を左記の通り改訂させていただきます。なにとぞご諒承の上、ひきつづきのご購読をお願いいたします。

記

「幼児の教育」　定価　三五〇円
（昭和六十年四月号より）

以上

昭和六十年三月

株式会社フレーベル館

読者各位

子どもの手術で思うこと

――子どもに病気をどう伝え、どう立ち向かわせたらいいのか――

木村民子

長男の学の耳の聴こえが悪いのではないかしらと、気になり出したのは、学が五歳の誕生日を迎えるころでした。呼んでも返事をしない、テレビの音を大きくかけて聞くなど、ちょっと気になる症状が出始めたのです。

初めは、テレビに夢中になっているからだろうか、何か自分で一生懸命やっているので、話しかけても気がつかないのだろう、このくらいの年齢ではよくあることと、タカをくくっていました。

保育園に通っていましたが、子どもたちの元気な声や先生の張りのある大きな声は、まだ聞こえていたようです。担任の先生にも、相談しましたが、園ではそれほど異常は感じられないということでした。

けれども次第に私が小さい声でボソッと言ったときなど「エッ？」と聞き返すことが多くなりました。言われたことにも、はかばかしい返事が返ってきません。

耳鼻科に何回か、連れていき診てもらいましたが、いつも、もう少し様子を見ましょうということになるのでした。

そうやって、気にかけながらも、毎日の忙しさに追われているうちに、月日が過ぎ、いつのまにか、学は六歳の秋を迎えました。

来春、小学校入学を控えての就学児健康診断があり、

私が学を連れて行ったときのことです。控室で待っていると、突然「木村学君のお母さんはいますか」と呼ばれました。私が驚いて立って行くと、「どうも学君は聴力に異常があるようです」と言われたのです。やっぱりと思いながらも、何故か震えてしまいました。面接の時、校長先生も心配して下さり、学校に上るまで一度精密検査を受けたほうがいいでしょうと勧めて下さいました。

どうして今まで、しっかりした病院で診察を受けなかったのかと悔まれてなりません。早速、以前私が耳の手術でお世話になった先生がまだいらっしゃるので、東大病院の耳鼻科に学を連れていきました。

診断の結果は、扁桃腺とアデノイド肥大、及び滲出性中耳炎でした。

滲出性中耳炎は、最近、四～八歳ぐらいの子どもに増えてきている病気だそうです。痛みも発熱もないので、本人もまわりも気づかないうちに、じわじわと聴こえが悪くなっていきます。

学の場合、扁桃腺もアデノイドも並外れて大きいため、炎症をおこしたりすると、耳管の粘膜がはれたり、耳管が閉じたりしがちなのです。そうすると耳管に空気が入りにくくなり、中耳に粘液がたまりやすくなります。又、組織液も滲出してきます。と同時に、中耳が陰圧になり、鼓膜が内側にへこんでしまうのです。そのため、聴力に影響を生じるというわけです。

ですから、鼓膜に穴をあけて、たまった液を吸い出すだけで、聴力は回復するそうですが、子どもの場合、鼓膜に穴を開けるのは、一大事。大人なら外来でも処置できますが、子どもは怖がったり、痛がったりで暴れると危険なので、全身麻酔をかけて手術をするということでした。

又、扁桃腺とアデノイドをとらないと、中耳炎が再発する可能性があるし、肥大ぐらいでは、手術を控える傾向があるといっても、学の場合は、よく熱を出し、かぜをひきやすい、いびきがひどい、口で息を吸う、よく食べ物を呑みこめないなどの症状がみられるので、思いきって、扁桃腺とアデノイドの摘出手術もしようというこ

とになりました。

お医者様から説明を受けたとき、私はガンと頭を殴られたような気がしました。私がもう少し注意してあげればよかったのです。

言われてみると、学のいびきはかなりひどいものでした。眠っているときに、ガガーガッといびきが急にとだえて、息をしているのか不安で、揺り起こすこともしばしばありました。

口をいつも半開きにしているので、「しっかり口をしめなさい。バカみたいに見えるわよ」と、無理な注文を出して、叱ったこともあります。食事のときは、牛乳を必ず飲む癖がついていました。牛乳が好きだからと思っていましたが、きっと噛んだものをよく飲み込めなかったので、流し込んでいたのでしょう。

二～三歳の頃は、毎月、一～二回は四〇度近くの熱を出していました。医者に連れていっても扁桃腺の熱だからと、下るのをじっと待つだけでした。その熱も四～五歳ぐらいになると、ほとんど出さなくなり、扁桃腺も気にならなくなっていましたのに。扁桃腺肥大の影響がこういう形で出てくるとは思いもよりませんでした。

急性中耳炎には、四～五回かかっていますが、痛がるとすぐ医者に連れていっていたので、ウミが出る前に抗生物質の薬を飲んで直っていました。ところが、〝抗生物質の使用が裏目に出て、滲出性中耳炎が急増している〟という先生もいるそうです。

ともあれ、手術は決ったのです。過去のことをあれこれ言ってもしかたありません。確かに、学にとっては、わずか六年間の人生の大半を何の因果か、苦しまなければならなかったのですから、母親としては申し訳ない気持でいっぱいです。

けれど幸い、簡単な手術です。入院も一週間ぐらいですみそうです。実を言うと、長女の方は先天性の心臓病で、四歳のとき大手術をしています。それに比べたら、たいしたことないと、私は気楽にかまえていました。

とはいえ、本人に手術のことを何と伝えようか、どう納得させようか、思案しました。長女のときは、手術も

何もまだよく解らない年齢ですから、「ママと病院へお泊りしようね」と誘ったのです。幸い心臓病の方は、痛みもなく、症状も見かけは普通の子と変りなかったので、長女は病気のこわさや、手術の大変さを知る由もなく、無邪気に、私を独占できる喜びで、「うん」と素直にコックリうなずいたものでした。

しかし、学はもう六歳ですから、解る範囲で説明してやらなければなりません。特に、この子は自分で納得しないと頑として動かないところがあります。

不必要に怖がらせないよう、「学ね、おのどの扁桃腺というのが大きいから摘るんだって、それから、お耳がよく聞こえないから、先生が聞こえるようにして下さるのよ。その方がいいものね」と、さりげなく話してみました。「うん、でもさ、お姉ちゃんみたいに、切ったところ残るの？」「ううん、のどや耳の中だから、切ったところ見えないのよ」「ふーん、でも、痛いんでしょう」「ちっとも痛くないわよ。だって学が眠っている間にしちゃうんだもの、平気だよね」「うん」

ちょうど、保育園のお友だちで、学と同じ症状の子がいて、その子は一足先に手術をし、元気な姿で戻っていましたので、学は「ぼくも手術するんだよ、今度はぼくの番だ」と、むしろ、得意になって友だちに言いふらしていたようです。

保育園の卒園式の後、三月十九日に入院しました。初めの夜は、私と二人きりになると、「ママ、こわいよ。一緒に寝てよ」と泣きべそをかきました。が、翌日、父親がそのことを冷かすと、「ううん、ぼく、あくびしただけだよ。それで涙がちょっと出ただけなの」と、学は負けおしみを言っていました。

「ぼく、注射しても泣かないよ。一本ぐらい平気だもん」と言っていたのに、手術の朝、二本もされて、やっぱり涙がポロポロこぼれ、声を出さずにシクシク泣き出しました。

親はそばにいながら何も助けてやれません。「がんばってね」と声をかけるだけ、ただ、手術の成功を祈るばかりでした。

手術は順調でしたが、出血がひどく、その処直のため思いの他時間がかかりました。戻ってきた姿を見て、私は血の気が失せました。耳や鼻や口から出血したあとがあり、鼻とのどに止血用のガーゼがつめられて、点滴で身動きできないのです。それから二日ぐらい、苦しい日が過ぎました。

よくしゃべれないので、何を言いたいのか、なかなか摑めません。そのうち、学は点滴をしていない手を胸の前に立て、「オギノイ」と言うのです。初め、何だろうと思いましたが、ハッと気づき、気づいたとたん、私は涙があふれてきました。「おいのり」と言ったのです。余り苦しいから、神様に助けて下さいと子ども心にお願いしたくなったのでしょう。学の小さな手と私の手を合わせて、お祈りしました。

そんな学も、ガーゼをとってもらうと、とたんに食事もとれるようになり、めきめき元気になりました。聴力も驚くほど回復し、「うるさい」と耳を押えるくらい、世の中の騒音をいやがっていました。入学以来、一日も休まず、三ヵ月後には、スイミングスクールに通えるようになりました。

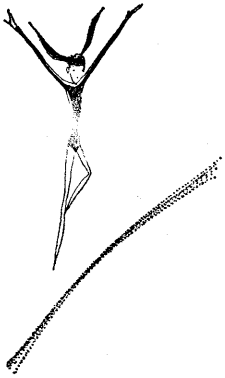
二人の子のどちらも、小さなうちに手術を経験させてしまった親として思うのですが、入院中の闘病生活はもちろん大変にはちがいないけれど、手術のことを本人に伝え、それを納得させることに、私は一番心を痛めました。病気は怪我とちがい、原因結果がはっきりしていません。まして生まれつきの障害を持った子は、運命として、それを甘受しなければなりません。

そうした病気を子どもが受け入れ、立ち向っていく強さを親はどのように与えたらいいのでしょうか。がんばれと口で励ましたり、おもちゃやお菓子でだますことも、少しは効果があるかもしれません。けれど、それは根本的な支えにはならないでしょう。幼い我子は、祈ることで苦しみに耐えました。家族や周囲の〝愛〟が、力となるかもしれません。

現代の小児医学が、子どもの病気について、そこまでケアして下されば、ありがたいと思うのです。

窓口すずめの思うこと

天川みな子



病院の薬剤師として六年も勤めていると色々な出来事に出会うものですし、それを通じて様々な人の姿、それも弱い立ち場に居る時、或いは可愛想な程取り乱している時の姿が見えて来る物です。勤め始めた頃は、何が何だか解らないまま毎日の仕事をこなすだけでしたが、少し自分に余裕が出て来ると、患者さん達と接触する機会も増え、一人前の薬剤師と言うには、まだ勉強不足ですが、一人前の窓口すずめ位にはなれるのです。

病院に来る人は皆、病人ですが、そのうちの半分位の人々は、病気とは言えないのです。こういう風に表現すると少し問題があるかもしれませんが、つまり自分達で病気を創り出している人達がとても多いのです。広義の心身症の様なもので、症状はあるのに原因が見つからなかったり、子供の場合だと周囲の大人が病気を創り出している事が多く、医師でも、そういうプライベートな部分には立ち入り難いという訳で、とりあえず症状の軽減という事と考えて治療を進めるのですが、最近の若い母親には、私達でさえもあきれてしまう事が多くあります。

窓口からホールを見て思うのですが、小さい子供は、今も昔もあまり変りがありません。彼らは身体の具合をかけひき無しに身体で表現して来ますから、本当に具合の悪い子は、ぐったりしている事が多いですし、それ程は具合が悪くないのに無理に連れて来られた子は親の目を盗んではちょんちょこしているので、初めて見る子で

も、大体の様子が解るものです。問題を感じるのは、後者の子供を病院に連れて来た親の方です。「元気は良いけれど鼻と咳が少し……。熱も今は無いけれど、出たら困るので薬を出して下さい。」勿論病院では診察しますし、希望通りに薬も出します。でも、本当にそれでいいのでしょうか……？

私達が子供の頃は、熱が出たら砂糖湯を飲んで、頭を冷して寝かしつけられ、少し元気になれば、とにかく何でもいいから食べなさいと言われました。便秘の為に発熱して浣腸された事や、いつも母が傍に居て我儘を聞いてくれた憶えなどもあります。きっと母は最大の愛情を以て心配を隠し、おおらかに構えていたのだと思います。親が子を心配する心はいつの時代も変らないと思いますが、今の若い母親は、即病院。即薬です。子供の自己回復力を忘れている様な気がしてなりません。母親のおおらかさが欠けているから子供の神経もピリピリして、喘息になったり、抵抗力の弱い子に育ってしまうのです。最近、少し話題になった「母原病」の始まりの一端がこんな所にもあるのではないかと肌寒い思いがします。

小学校の中学年位になると子供の行動範囲が広くなる為、時々、常識を疑いたくなる様な親子が出現します。例えば病院のホールで追いかけごっこをしたり、サッカーまがいの事をしている子供がいます。さて母親は……と言えば、子供を叱る様子もなく、ホールのテレビを見ていたり、井戸端会議に熱中してい、時々、子供に向って形式だけ「こら、こら。」と声をかける位の人がほとんどです。周囲の人も「吾れ関せず。」という状態です。私が思い余って注意をしに行くと、大抵は「ほら、怒られた。止めなさい。」と言い、自分のしている事に再び熱中する母親がほとんどで、あやまりの言葉を聞く事は、まずありません。ひどい時は「こっちにいらっしゃい。」と子供を自分の方へ引き寄せて、注意した私を母親が睨みつける始末です。

核家族化が進み、自分中心の社会に暮らしている為でしょうか、実際、子供に接する時間は昔とそれ程差がな

い筈なのに、子供を見ていない親が多くなり、会話もスキンシップも減少している様な気がします。これは、子供の病状を把握していない親が増えている事からも考えられる事です。

先日、二才位の子供が、背中全体を火膨れにして来ました。話によると、海で肌を焼きすぎた様なのです。小さい子供は遊ぶのが仕事ですから、遊び始めると我を忘れてしまうものです。大人に比べて肌も弱いし、体表面積も大きいのですから、これらの事を充分にふまえて、遊ばせる時間を考え、子供の状態をよく観察して、適した環境を作り考えてやらなければなりません。不幸中の幸いで、その子の火傷は、ひどいなりにも火膨れ程度で済んだから良かった様なものの、その為に脱水を起こせば、発熱したり死んでしまう事も充分有り得る事で、その可能性は大人のそれよりはるかに高いのですから、小さい子供程、親の管理の不行届が生命の危険につながるという事を、もっと感じて欲しいと思いました。

子供の管理がきちんとなされていないという事に関しては、七～八才になってもカプセルや錠剤の飲めない子供が多いという事からも推測されます。十才でも、かなりの人数です。これは、昔に比べて子供用の薬が普及して来た事も原因ですが、その年齢になっても錠剤を飲めない事をあたりまえだと思っている親が多いのには、大変、驚いてしまいます。

ところで、病院には色々な人が診察を受けに来ますが、或る日、胃の検査結果を聞きに来た患者さんには、分裂病で精神病院に入院した事があり、先生が検査結果の説明をしている時に発作を起こして、突然、叫び声をあげて暴れ、走り出したのです。待合席で診察を待つ人や、ホールで会計をしていた人々は、大パニック状態になりました。

この時、乳飲み子を連れて来ていた若い母親の中には、子供をそこに置いたまま逃げ出した人がいました。その子を抱えて恐怖の中から逃げ出したのは、隣りに座っていた見ず知らずの中年女性でした。後でその母親は中年女性から、ひどくお叱りを受けていたそうですが、

子供を危険から守る事さえ出来ない親が居るというのは、同時代の私達としても、心の痛む思いがしたのを覚えています。

また、今まで話して来た年代よりも少し高い年齢層の話になってしまいますが、事故や病気で入院して来る中学、高校生も複雑な家庭環境を持っている場合が割合に多いのですが、この点に注目するべきだと思います。

脳腫瘍で入院したA君は、シンナーの吸いすぎで脳に異常を来していました。脳腫瘍とシンナーのつながりは私には良く解りませんが、彼は手術後の無意識の中で母を呼び、そして夜通しその母に向って「バカヤロー。コノヤロー。」と怒鳴り続けるのです。彼の生活環境がどうであったか知りません。しかし、人の愛情やふれあいに飢えていた様に私には感じられます。

オートバイ事故で入院したO君は母親が蒸発し、幼い頃から父親と祖父母に育てられ、物心ついた頃には世間で言う悪い仲間に入っていました。結局、彼はその事故の後遺症の為に今も通院しているのですが、薬を取りに来ては、窓口で私達に話しかけ、帰りたくなさそうに院内を歩き廻っている事が多いのです。

彼らが道を間違えた原因の大きな要素のひとつに親とのスキンシップの不足があると思います。何故なら、彼らは私達には人なつっこい笑顔で話しかけ、退院した後も素直な人間として接しようと努力しているのが良く分るからです。彼らはいつも何かに飢えているのだと思います。

現在、私の勤めている病院には、東京のベッドタウンに有り、周囲には社宅やマンションがたくさん建っています。この辺は共稼ぎの夫婦はそれ程多くない様で、聞く所によると、母親が家に居る家庭の多くは、昼食を子供と一緒に喫茶店のランチ等、外で済ませてしまうのだそうです。おいしい物を食べに行く事は、それなりに意義のある事だと思いますが、ただ単に外食で簡単に済ますと言うのは、どうかと思います。

ついでに書き加えますが、女性の手間を省く為、色々な冷凍食品やインスタント食品が普及した結果、それに

つれて子供の成人病的疾病が問題になりつつあります。現に私の勤める病院でも、この為かどうかはよく分りませんが、年寄りしか飲まない様な薬を持って帰る子供が数名います。

また、ここまで行かなくても、味音痴の子供が増えているということを聞きますが、これらの事は教育以前の問題の様に思えて仕方がありません。

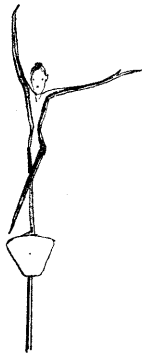
子供は親を見て育つと言いますが、小さい子供は真白な吸い取り紙と同じで、周囲の色をどんどん吸収して行きます。窓口で「私の薬は遅くされている。」と怒鳴っている女性。バスの時間に間に合わないとか、出してくれと頼んだ薬が入っていないと言って感情的になっている母親。

女性ばかりではありません。専門医のいない日祭日に軽く怪我をした子を連れて来て「緊急だから」を連発し、専門医を呼び出して欲しいと騒ぎたてている父親。それぞれの人の気持ちは充分に理解できますし、どうにかしてあげたいと思われる人達もたくさん居ますが、ほとんどの人達は、自分の事だけ、自分の主張だけをぶつけて来るのです。そして、子供は親が何でも人のせいにして、自分の主張だけしているのを、じっと見て、吸収しているのです。だからこそ、私は本音で生きているのを見られても恥しくない生き方をしたいと思いますし、特に子供の父親と母親は、生き方や家庭の在り方、そして子供の育て方などに関しての共通した方向性をしっかり持っていて欲しいと思います。

子供が、これからの世の中をより良く生きて行ける様に、親は子供が小さい頃に「お金では決して手に入れる事のできない大切な事」を充分に教え、与えてやるべきなのではないでしょうか。しかし、現代の物質優先傾向の社会では、それが少なくなりすぎている様な感じがします。それとも、私が大切だと思っている様な事は、必要でない世の中になって行くのかもしれませんが、もし、そうだとすれば、大変に恐しい事で、考えただけで背筋が冷たくなってしまいます。

（新行徳病院、主任薬剤師）

子どもの病気と成長と



塚田幸子

猛暑の東京から、涼しさを通り越して朝晩は寒いほどの信州の高原に行った昨年の夏、小学一年の次女を筆頭に、家族全員が次々に風邪をひいてしまいました。夏風邪は長引くのが常ということを三年ぶりに思い起こしているこの頃です。というのも、三年間、米国コロラド州デンバーで生活し、一昨年十二月に帰国した私たち一家にとって、日本の風邪は実に久しぶりの体験だったからです。

帰国直後もまた超多忙で、各自がそれぞれに再び日本の生活にはいる為の諸々の手続きを経て一段落ついた冬休みは冬休みで、その季節の風邪で全員ダウンしていたことを思い出しますが、それよりもこの夏風邪はずっと厄介で長い間悩まされたのです。

それにつけても思うことは、大人たちは冬休みや夏休みというスケジュールが頭にあって、どっと気のゆるんだ時点で病気の侵入を許してしまうというのはわかりま

すが、どうして子どもたちまで一緒にかかったのでしょうということです。子どもたちは、大人の態度を敏感に感じとっているからでしょうか、あるいは、大人たちの注意の目が耳が働かなくなるからでしょうか、一家全員が風邪でダウンというパターンはよくあることのようです。いずれにしても病気になったり、悪化したりするのは、何か緊張を要することが一段落して、気のゆるみが出た時ということが多いように思います。その証拠かどうか、私たち一家は、デンバーで暮した三年間、寝こむほどの病気に全員がかかったことはありませんでした。二人の子どもたちが前後して原因不明の下痢とその後の高熱という症状を呈してそれぞれ一週間近く学校、幼稚園をお休みするということが一度あり、それが三年の内で最も重い病気でした。それも渡米直後ではなく三度目の冬も終わりという早春の頃でした。これは、向こうではよくあるスタマックフルー（主として下痢が症状のインフルエンザ）だったことは途中でわかったのですが、このように、風邪と言っても彼の地では鼻やのどは何ともなくて下痢をするタイプのものや、耳を痛めるタイプ（イヤ・インフェクション）ばかり、鼻水もなく咳もなしでは風邪をひいたという実感がなかったのかもしれません。同じアメリカでも他の州、他の土地ではまた違うようです。

三年と言えば、ようやくその土地になじんで、緊張感も薄れ始めた頃だったことでしょう。とりわけ次女については、帰国直前は現地の子どもになりきったかのように見えました。日本での生まれてから三年弱の生活とデンバーでの生活とが、ほぼ同じ長さになっていましたから無理もありません。次女が日本式の鼻づまりや鼻水、咳という風邪をひくと大変に厄介なのでした。上手に鼻もかめないのですし、咳こみながら熱さえなければ平常時のように遊びまわってしまうのです。冷たい風に当たらないようにとか、直射日光にさらされないようにという注意をしても、トンボを追って出て行ってしまいますし、家の中で静かにしているように注意しても、ボールを見つけて結局とびはねて大汗をかいてしまうといった

始末でした。冬とは違って外の世界はあまりにも魅力的で、冬の風邪では起こらない心配と苦労が重なり、自分までも風邪をひいて、この夏の後半は私には大変なものになってしまいました。

一時は気管支炎や肺炎にでもなったかしらと心配させられたものの祖父母の助けもあり、東京に帰ると次女の風邪も快方に向かい、今はホッと胸をなでおろしています。

そんな今、この次女の風邪のことを考えているのですが、この子どもにとっては、あるいは再び日本で暮らすに当たってくぐりぬけねばならない門のひとつではなかったかと思うのです。この子は、この夏風邪の最中に、二本目の乳歯がぬけました。一か月ほど前の一本目の時にも食事をろくにとらず、痛がったり気にしたりして周囲に心配をまき散らしましたが、二本目も同様に大騒ぎしていました。今は三本目がぬけて夏休みも終わろうとしています。

こう述べてくるとこの子どもの夏休みが、夏風邪と乳歯の生え変わりに終始していたように聞こえるかもしれません。けれども、林間学校の高校生と競い合うようにして、しっかりと自分の手足で山登りをしたり、トンボやバッタを何十匹もつかまえては放したこと等々の方が、成長により直接的に結びついていたということもできないような気が私にはするのです。

三本目の歯がぬけた時、より多くの出血に驚いて、シーツやタオルでぬぐってしまった次女。この時、この子どもは、鏡でぬけた歯のあとを見て、その前にぬけた歯のあとに、新しい白い歯の先端が見えていることを発見します。そして大発見という面持ちで私に見せに来るのです。子どもより先に気づいていた私は驚いて見せるという演技をせずに、「そうよ、もっと前から生えてたわよ」などて言ってしまい、この子をかんかんに怒らせてしまうのですが……。

そしてまた長かった夏風邪がこじれる寸前、祖父母が来訪して、つきっきりで額を冷やし、夜具をかけて看病してくれたことがよほど嬉しかったらしく、「風邪ひい

たら、こうやってタオルをぬらしておでこにのっけるのね。」「毛布をかけて、暑くてもがまんしてこうしているのね。」と実に嬉しそうな顔で大発見を私に語るのです。話をする時に、まるでおままごとでもするように動作をいれて、身体全体で演じています。

大人になってからも病の時には、平常とは異なる感じ方をしたり、鋭敏にものごとを感じとったりして、深く学び成長することがありますが、この子どもも、この長かった夏風邪では、歯の生え変わりと共に、大切なことをいくつも学んだことでしょう。

私自身はと言えば、この子どもの成長を見守りながら、日本に帰って、両親や多くの友人に囲まれて、気を許す時が多く持て、風邪をひいていられるというのが、妙に嬉しく心なごむものだと感じています。デンバーでは、決して病気にかかってはならない。絶対に事故を起こしてならないという強い構えがいつもあったものでした。病気をするゆとりもなく、子どもの成長を穏やかに見守るゆとりもなかったような気がするのです。

この次女がふともらした言葉、「また赤ちゃんにもどりたいなあ」というのも本当なら、「一日中寝てばかりいるのが赤ちゃんよ」と言われて、それは「いやだあ」というのも本当の気持ち、それは抱かれている子どもにも抱いている私にも共通にある思いです。

家中で一番幼ない存在で、いつも甘やかされている次女が「赤ちゃんにもどりたい」と言うのを聞いて、いつも「おねえさんじゃなくて妹になりたかった」と言っていた長女が、黙って見ていられたのも、「おねえちゃんだっておかあさんにだっこしたいけど、いつも先にNちゃんがのってるんだもの」と長い間の沈黙を破って告白したふざけ合いのシーンがその前にあったからでしょう。

これらはすべて夏風邪の間にあったことでした。私自身が十分にリラックスして気をぬいていたのでした。その為に夏風邪という代償を支払わねばならなかったとしても十分に有意義だったと言えるのではないかと今、私は思っています。

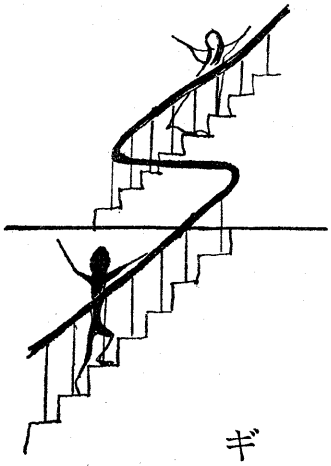
子どもに多いところから、「わらはやみ」と名づけられたとも、また、この病気の鬼を子どもとする唐の俗説に由来したからとも、さらには、ワラグ(樫)病いで、ふるえにその特徴を見い出したからとも、語源はこれらの他にも多様多彩である。今日、間欠熱の一種と考えられており、恐らくは、マラリアに似た熱病であろうとされている。悪寒・発熱が隔日、或いは毎日、時を定めておこる病いという。瘧(おこり)、えやみと呼ばれることもある。

童(わらは)病(やみ)

この「わらはやみ」をもって、物語の主軸に据え、結構を志向した作品があった。その作品においては、子どもが「わらはやみ」を病むのではなく、十八歳の成人男子が罹病している。『源氏物語』「若紫」の巻は、源氏が「わらはやみ」を患い、いろいろ加持祈禱をこころみるが効がなく、人のすすめのままに北山の某寺を訪ね、聖の祈禱を受けるところから話が展開してゆく。

山の奥にわけ入った源氏は、年老いた聖が差し出した護符の紙を飲み、加持を授けられながら勤行につとめている。時あって、聖の庵室から程近い、清げなる家屋にみとめた女児こそ、十歳ばかりなる若紫であった。垣間見た少女は、髪を扇を広げたようにゆらゆらとさせ、泣き顔で、「雀の子を犬君(いぬき)が逃がしつる、伏籠(ふせご)の中に、籠(こ)めたりつるものを」と、頑是ない可愛らしさである。奥深い山中で、雀の子と戯れる幼女の身の上を聞き知った源氏は、そこはかとない悲しみがいや増してゆくのであった。やがては手許に引き寄せて後見をすることになる若紫に対して、源氏はおのれの運命と同じい、母を迅くに喪った者どうしの、癒やしようのない悲哀を嗅ぎとったのではなかったか。

少なくとも源氏物語の「わらはやみ」とは、幼年時代のゆるぎない安らぎを喪失した、心の欠如感に連なる病いを潜伏させていたのではあるまいか。(み)



ギリシャの小さな幼稚園での二年間

大多和　檀（まゆみ）

1　日本人学校幼稚部へ

一九八二年の四月から八四年の三月までの二年間、ギリシャはアテネの日本人学校幼稚部に勤務するという体験をしてきました。全く思いもかけないことで、突然の出発となりました。それまで勤務していた幼稚園の四才児の子ども達の「ボク達がいるのにどうして先生、ギリシャに行くの？」という〝重い〟言葉をあとにして……。

その日本人学校（小中学部＋幼稚部）は、アテネの郊外にあり、道路では、カメがノコノコと歩いていたり、空地には赤いケシ、黄色い春菊が咲き乱れ、ヤギもいたりする、というのどかな地区の中心地、雑貨屋、薬屋、パン屋があるという一角に位置しています。以前はホテルだったという建物が、小中学部で、その離れ、といった小さな部屋が幼稚部です。（人数は、幼小中合わせて百十名前後です）白いよろい戸付きの窓が付いたかわいらしい部屋で、出入口は一枚のドアです。

2　一年目が終った時

幼稚部は五才児一クラスのみです。出発前、「一人で

担当することになりますが」と言われた事に対して何の思いも持たずに出かけましたが、一年間が終って、喜びを分かち合う人がいない、というのはなんとさびしい事かとつくづく思いました。逆に言えば、日本に居た時には喜びを分かち合う人を回りに持っていたんだなあ、と改めて「同僚」の存在を思い知らされました。

仕事の大変さや、困ったりわからない事でも一人で考えなければならないことは、なんとかやっていけます。でも一人一人の子ども達について、今日こんな事があった、いい顔をしてた、こんな風に変ってきた、とかいう事を語り合う相手がいない、というのは本当にさびしいことでした。これは日本に居たら気付かなかった新しい発見の一つです。

3 保育のこと

私が、幼稚園で子どもに育てたいと思っていること——自分の好きなもの、本を見つけ自分自身に自信が持てる。他の人の存在を知り、その存在も認められる——は、アテネにいても同じですが、子ども達への接し方は、少し変ったようです。一人一人の子どもが、かわいくてかわいくて「かわいがりまくって」保育をしていました。「先生」というより、「おばさん」という感じでした。なぜそうになったかを考えてみると、

(1) 一年目は十二名、二年目は四月に八名（のちに十二名）で出発という、教職について初めて経験する少人数。

(2) ここへ入国する前は、英語系の幼稚園や、ギリシャの幼稚園に行っていた人、どこにも行かずに家に居た人、と「前歴」は様々ですが、前者は、「おかあさん、今度の幼稚園は、先生の言うことが全部わかるよ」後者は、友達と遊べるのが、ひたすらうれしいという様子。

(3) お母様方は、「よくアテネまで来て下さって……。お友達と楽しく遊べる経験をたくさんさせて下さい。」

(4) 私自身、何もかも初めての体験ばかりで緊張している中で、子ども達とかかわる事だけは、これまでと変りなく、そこではじめて自分らしさを取り戻すという状態にあった事。

これら(1)～(4)の事が重なって、「かわいくてかわいくて」という思いがより強くなって「かわいがりまくり保育」になったのだと思います。又、ギリシャの生活に関しては子ども達の「後輩」として、そして日本にいたら年長児の遊びを見ていて伝わる、という遊びを伝えるもう一つの「年長児」として接する自分がありました。

子ども達同志は、ちょっと人数の多い「兄弟」という感じでした。子犬の様にたわむれたり、ギリシャの恵まれた自然の中で、くだもの取りをしたり花つみをしたり木登りをしたり。何をするにしても、少人数の良さで、一人一人の持てる力を思う存分出せ、スクールバスで九時四十分頃登園して、一時半に又、バスで帰るまで、フルに遊び込んだ子ども達です。でも、その中での問題点もいくつかありました。

それは、一人一人の良さが皆に行き渡る、という反面、一人が、こうだ、と言うとそれが絶対的なものになってしまいがちなこと。十二名分の良さしか共鳴し合わない。(十二名の限度がある)子どもから子どもへと伝達していく遊びが、保育者を通さなければならない。従って保育者は、本当の「子ども」にならなければ、単に、十二名の子ども達の「ガキ大将」になってしまう恐れがあること。私の一人よがりになってしまうのではという心配。こんな問題点を乗り越えていける一つの方法として、他の幼稚園と交流を持ったり、近所の公園に出かけて行って、他の子ども達の遊びを見たり一緒に遊ぶこと、があるのではないかと考えました。私自身、ギリシャ語がよく出来ない、相手の言うことが理解できない、という不安はありましたが、そこは「クソ度胸」、何はともあれやってみなければ、と学校の外にもどんどん出かけて行きました。

4 ギリシャの幼稚園と

あちこち出歩いていた頃、思いもかけず、近所の幼稚園(徒歩十五分位の所)から、「是非交流を持ちたい。一度で終り、というのではなく、お互いに、自分の園以外の人を知り、言葉はわからなくても一緒に遊べる、と

いう体験をさせたいから。」と、とてもハンサムな男の先生が、我幼稚部にやってきたのです。私の方でも願ってもないことでした。子ども達のいる時間に来てくれましたので、一緒に遊び、すっかり、その先生—イリアス先生—が気に入ったようです。「今度遊びにいらっしゃいと言っているのよ。」と話しましたら、その喜んだこと！

「おみやげ持っていこうよ」という相談になり、カレンダーを作って遊びに出かけました。まず一番の感想は、「ワァーッきれい！　ホテルみたい。お庭が広くていいね。」—ここは銀行立の保育園で、施設の貧しさが目立つギリシャの中では、抜群の施設の良さを誇り、三才児から五才児までの四クラスです—イリアス先生はじめ他の先生方、ギリシャの子ども達の「いらっしゃい」という言葉に迎えられ、ビックリしつつも、一緒に集団遊びを楽しみ、庭の遊具でも遊び、「今度は幼稚園（自分達の）にも来てもらいたい」と言いつつ帰って来ました。

その後は、こんな時期にはこんな事して遊ぼう、とお互いの計画を合わせ、数回行き来したあと、卒園の前には、一緒にピクニックへ。アテネのさらに郊外に、キャンプ地を持っている、というのでそこへ出かけたのです。キャンプ地ということから、私は、バンガロー風の建物がある所をイメージしてたのですが、これが大違い。立派な「別荘」で、大きな建物の中には、泊まれる様にベッドのある部屋、食堂などがあります。（サマーキャンプで使うそうです）庭は、建物をかこんで、東西南北に、遊具のある所、様々な花が咲き乱れている所、木のある所、とわかれています。それらの所に散らばって、ギリシャの、日本の子ども達がブランコに乗ったり、花つみをしたりして遊んでいる様子は、私には、まるで映画のシーンのように見えました。

子ども達が、口をモグモグ動かしているので聞いてみると、「クルミだよ、おいしいよ。」これを見て、うれしかったのは、子ども達が、私に聞きに来ることなく、ギリシャの先生に、石でカラを割って食べる、という方法を聞き出し、ギリシャの人が食べるのを見て自分達も口に入れてみた、ということです。異なる人種の人が食べ

ている物を、自分も口にして確かめるのは大事なことだし、特に高学年になる程、試しもせずに、ギリシャのものは㈠、日本のものは㈡、と決めつけてしまう傾向が見られ、残念に思っていましたので。

▲ギリシャの保育園の人達が「お客さん」で，買い物に来てくれました。お金の単位は，ドラクマといいます。

5 ギリシャの修了の日

東京の公立幼稚園では、「儀式」という感じのその日ですが、この保育園では、「参観日」といった感じです。玄関で園長先生が親―両親とも、又、おばあちゃん、おじいちゃんも一緒という姿が目立ちました―を迎えます。我家にお客様を迎えた、という感じで。三三五五集まってきた親や子ども達が外に行き―六月はもう夏なの

▲お店やさんごっこのあと，一緒に集団あそび。

で、もう一つ見た幼稚園もやはり外で行っていました。それぞれの場所に座った所で、園長先生のお話が、親にむかって始まります。それが終ると、三才児から、先生と一緒に、まん中の芝生に出てきて簡単なおどり、次に四才児が、二人で車に乗り二チームで「ヨーイドン」最後が終了の五才児でギリシャのフォークダンスを踊ります。全部が終ると、親子で園内に行き、これまでに、子ども達が描いたり作ったりした作品を見てまわり、各自が、自分の作品を台紙ごと(ベージュの紙)とって丸め、帰っていくのです。玄関では、そんな親子と先生達が、あちこちで写真をとっている姿も見られましたが、これで修了の日は終り。途中少しも、静かに、とか行儀よく、とか言うこともなく、涙を流す姿もなく、実に、楽しそうに、うれしそうに、帰っていきました。(もう一つの私立幼稚園の方では、日本の「浦島太郎」のフランス語訳をギリシャ語に直して、三～五才児までが一緒に、オペレッタのような劇をしていました。)

概して、ギリシャ人は、格式ばらず、毎日の生活を楽しみ、おおらかな人達のようです。教会での結婚式、洗礼式、独立記念日の式典等でも、いつの間にか始まって、いつの間にか終りになり、それが、幼稚園の修了の日にも現われているのだと思いました。

6 先生達、及び大人と子ども

ギリシャの人達の、こだわりのなさ、おおらかさは、普段の日々でも然りで、私達が、外から「今日は」と声をかけると、全く知らない異国人である私達を、「中にいらっしゃい」と、門をあけて迎えてくれるのです。

保育の中でも、子ども達が外で遊んでいる時には、先生同志かたまっておしゃべりをしています。なぜ一緒に遊ばないのか、と聞くと、逆に、「なぜ一緒に遊ぶ必要があるのか。子ども達で遊んでいるのに。」と、不思議そうに聞かれてしまいます。協同で一つの物を作り上げる、遊びに必要なものを作る、という活動も、ほとんど見られませんでした。「個が何よりも大切だし、じっくりと物を作るとか、手先の器用さがないので、その面を

育てている」と言っていました。

でも、行事的な事、クリスマス会、カーニバルなどをする時には、先生達も、子ども達と一緒になって、それを楽しみ、その人の日常生活そのままの姿で、真剣に、暖かく接しているように見られました。

私のギリシャ語の能力では、この辺までで、ギリシャの幼稚園では、子ども達に何を育てようとしているのか、どんなカリキュラムを持っているのかなどを、話し合えなかったのは、とても残念でした。

一般に、ギリシャの大人達は、とても子どもをかわいがります。他の人の子どもにも、必ず、「元気？」と声をかけたり、私達が歩いていても、「どこから来たの？」「元気？」「なんとかわいい子ども達！」というように。子どもの誕生日には、徹底して、一緒に、踊りやゲームや会話を楽しみます。でも、その反面、子どもが外で遊んでいても、親の用事は、有無を言わずやらせますし、大人の生活に入ってきたり、何かうるさい事を言ったりすると、大声でしかります。赤ちゃんが、長い時間ワァーワァー泣く、というのも見かけませんでした。むずかって泣くと、「ナーニ、ナーニ」と、やさしくあやすのです。なんと幸せな子ども達でしょう。「経済力」では、日本には、はるかに及ばない貧しいギリシャですが、子ども達の目は、キラキラ輝やいていました。

7 二年間が終って

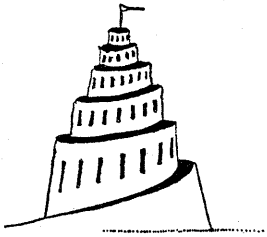
言葉もわからず、生活習慣も全くわからない国で生活してみて、何もかもはじめてという経験が、「この年」になって又出来た。ということは、それ自体、とても貴重な体験でした。家庭を離れ、幼稚園という集団生活をはじめてする子ども達と同じではないかと。

その体験の中で、自分自身の新たな面も発見しましたし、大好きになったギリシャの友達もできました。そして何よりも、旅立ちの時に、日本を離れていた時に、こうして再び帰ってきた時に、なんと、私は、かけがえのない親、かけがえのない友たちにかこまれているのか、と改めて強く強く感じました。

（東京・港南幼稚園）

兎園随筆⑦

「……ではない」



蕪木寿江

バスから降りると一目散に走って来る。「かぶらぎとしえ先生、おはよう。先生としえだもんね、お姉ちゃんに教えて貰ったんだよ。」と、年長組になった始めての日から友達がびっくりするような疳高い声で得意そうに喋る。

それから二日目、黒板に書いてあるきょうの月日のすぐ下に、「ではない」と小さく書かれてある文字を見つける。例えば、4がつ12にちではない。もくようびではない。というふうに、「は」の使い方もわきまえている。何日続くかなと思っているうちに今度は、その日の数字が明日の日に変っていたり、昨日の日だったり、あゆみシールを貼るお友達が「先生、違っている」と言うのを横で聞いていて、「やったー」という表情で、「にたっ」とする。「Tちゃん数字を書くのは上手だけれど、お友達がわからなくなるからね。」と言うと、「うん、うん」と首を縦に振るが、一のバスできて最後の四のバスまで

続く。黒板の字をそおっと直しておくが、すぐに消して書く。「ではない」も、四日間続いたので、又続くのかな、と、白墨も黒板消しもそのままにしておく。もう黒板には書かずに一人ひとりに指で教えてあげていると、自分も「教えてあげようか」と言ってシールを貼るところを指でさしている。

外に誘って遊び始めるとさっと小さい身体をひるがえして部屋に戻り、白墨を握る。文字を書くことが好きなので、ノートをつくって渡した。どんなに喜ぶかなと思ったのだが、そのまま道具入れにしまったままでいるだけ、手紙を書いて渡したが、声をだして読んだだけですぐにかばんに入れていた。クラスの友達の靴は隠されてあり、そのいたずらの瞬間を見極めようとしていた矢先き、隣の年少組のお弁当がなくなった。「お腹がすいて可哀想だから、皆も一緒に探しましょう、」と言うと、「知らない、わからない」と言いながらも積木のところ、ブロックの中、おままごとの棚を探したがなかった。次の日の午後、何気なく見た他の子どもの道具入れの奥にブルーのお弁当箱の袋が見えた。「よかったわねえ、」とほっとして子ども達と話していると、傍にいたTちゃんが、「もうしない、もうしない」と早口で言っている。抱き寄せて背中を撫でると、「もうしない」と言いながら腕の中から逃がれようとしている。

悩んだ末、お母さんに電話をかける。「年少組の終りの頃は投げなくなったし、隠さなくなったって言われたんですけどね……。家でも外へは滅多に出ないんですよ。どうしたらいいでしょうね。」と言われる。「子どもは誰でも自己中心的ですし、Tちゃんは特に話をするのが好きなので、一対一でよく聞いてあげて相手になってあげることですね。」と言うと、「畑に行っているわけでもないのに、年寄がいると忙がしくて……なかなか聞いてあげられないんですよ。三人も子どもがいるとね……。わざわざいらっしゃらなくてもよく言って聞かせますから」と言われた。

ご両親の協力がなければとても教育はできない、と私自身だんだん弱気になって、登園してくるTちゃんを構

えて待つようになる。相変らず一番に走ってきては「かぶらぎとしえ先生、おはよう」を部屋の入口で待っている私めざして大声で言う。「きょうはなんのいたずらをしようかな、」と、そんな眼を感ずる時もあるのだが、朝の元気な挨拶にきょうは大丈夫——と、不安を払って迎える。

「Yちゃんの靴がない」と言うと、あらぬ方からすぐに持ってきたり、又、友達の靴を隠そうとしていたところに合うと、「今、Kちゃんの靴を持って行ってあげるの」と顔色を変えずに話す。身体が小さいので負けずに大きな声を出すのか。広い家にお年寄と住んでいるから声が自然に大きくなるのか。自分を常に認めて貰いたくて次から次からいたずらを考えるのか。

六月に家庭訪問に行くと、両手を高く上げて飛びあがって喜んでくれた。「先生が来るのが嬉しくて、門の前で一時間も立って待っていたんですよ、」とお母さんが言われた。その日のあの無邪気な表情がいつも脳裏から離れない。

夏休み前に年長組の絵を市民ギャラリーに持って行った。横浜市の主催で六才以上の小学生までの絵を一堂に展示する。会場は山下公園に近く、展覧会の帰りに船を見ながら家族でお弁当を食べるのもよいと思うし、記念品として素敵なデザインのバッチを全員にくださるのがいい。九月一日にその時の絵と一緒にバッチを「ごほうびよ」と言って一人ひとりに渡すのが又嬉しい。四ヂと三ヂの箱に入っている。出したり入れたりしてかばんにしまう。

Tちゃんも喜んで手に持っていたのに、あっという間に窓から外の栗畑に投げてしまった。二学期の初日である。そのまま知らん顔をしてみる。その方がいいかなと思う。「どうして捨てたの」と聞いてみようと思う、でもだまっていた方がいいと思う。いや、ここで怒るべきだと思いかえす。

「どうして投げたの？」と聞くと、「いらないもん」と言う。手に持っている空箱をいじくりながら言う。「先生、このバッチ大好きなの。きれいな色でしょう。Tち

ゃんのお兄ちゃんもお姉ちゃんも持っているのよ」と話すと、「えっ、お姉ちゃんも？」いくらか動揺した声がかえってくる。

一緒に担任しているM先生に、「Tちゃんが欲しいようだったら探がしに行ってね」と言って年長組の始業式にでる。草は生えているし、小さいもの（一・五㌢四方）だし、なかなか見つからないだろうと思って、「一のバスが出てしまってもいいから、ゆっくり捜していてね」と頼む。「もうしない、もうしない」を言っていたが、光っていたのですぐにわかったそうだ。「M先生と一緒に見つけたんだよ」と、遅れてホールに入ってきて得意そうに言う。「よかったわね、大切にしてね。」と小声で話す。いつも窓から見てる栗畑に垣根を越えて、M先生と二人だけで行ったということが、バッチがあったことよりも何よりも嬉しかったのだろう。

運動会も過ぎて外で遊ぶ姿も見られるようになった十月のはじめに、各種目をやり終えて集めた体力テストの用紙がなくなった。ピアノの上になど置いておく方が悪いと思いながらも思いきって、「Tちゃん、体力テストのあの紙持ってきてね」と言うと、舞台のカーテンの下からすぐに持ってきた。「ありがとう」だけ言ってふれなかった。

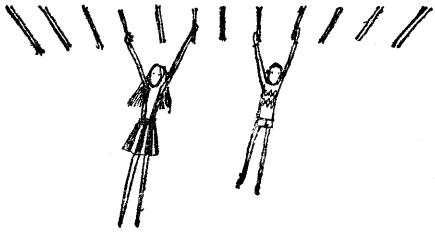
次の日は、運動会の紙芝居をつくると言って、プログラムを横におき、一番から描きだした。「ハトポッポ体操弾いてー」「お花の体操」「次はオリンピックマーチだよ」というように始めのところだけ弾くと、喜んで歌いながらさっさと描く。自分を認め、自分の為に弾いているということがTちゃんにとってはこの上ない満足だったのだろう。

昔の笑い話の紙芝居七巻セットを借りたと話すと、その度に、自由画帳に〇巻、題名、枚数を七巻まで書き通す。バザーやさんごっこでは、くじ引きの番号とあたった玩具の番号を合わせる役で年少さんに売っている。M先生が入院したことを話すと真先きに、「しんぱいです。あしはいたいのですか」と手紙を書く。椅子に乗って黒板の中心に〇を書き、左右に一つずつ増していって下ま

で〇で埋める。二百まで知っていることを前に聞いていたので、「〇の中に数字を入れてみる？」と言うと、「うん」と弾むような声で書きだす。「69の次はなんだっけ」と顔を見る。「70よ」と言うと安心して遂に終りまで書き続ける。

この一ケ月間、いたずらをしていない。友達を求めていたのかもしれない。声もいくらか小さくなった。いろいろの事を試しながら人として育っていく為の生き方を模索していたのだろうか。我々大人もそうだ。子どものよさを保存し育てるのが保育でありながら、観察者の眼になっていないか。保育者ではない、と書かれてしまいそう――。きょうも又、「ねえー、かぶらぎとしえせんせい」と呼んでいる。呼ばれなくてもふりむけないものか。言葉にならない内面的な声が聞けないものか――。

（神奈川・市が尾幼稚園）



ヒグマの子育て

前田菜穂子

日本には、本州にツキノワグマ、北海道にヒグマと、2種類のクマが生息している。

私の勤務しているのぼりべつクマ牧場には、そのうち北海道のヒグマばかり、約二〇〇頭が飼育されていて、毎年三〇～四〇頭の子グマが生まれ育っている。ここには、産室という野生のヒグマが冬ごもりをし、その間に子を生み育てる穴に似せて作った個室があり、そこで毎年ヒグマの出産と子育てが繰り広げられる。

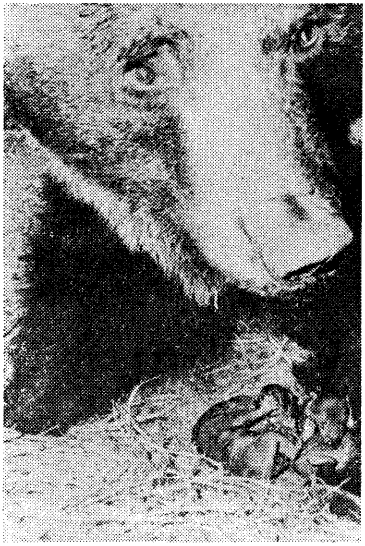
クマ牧場に勤めてちょうど一〇年。一〇回の出産と子育に立ち会って、ヒグマ達から教えてもらったことを、皆様にお伝えしましょう。

ヒグマは普通、根雪になる一二月中～下旬に土穴や木のウロ、岩などに冬ごもりのための穴を、前肢の長く(一二～一三cm)鋭いツメを使い主に土に自分で穴を掘りその中で春まで冬ごもりをする。秋に実った、コクワ、ヤマブドウ、ドングリ、ナナカマドなど木の実や昆虫などで食いだめをして、皮下脂肪が七～八cmにも厚く付き、十分日光浴をした後、四日間ほど絶食状態を過し

て、胃や腸をすっかりきれいにして冬ごもりに入る。

全く飲まず食わずで、最も寒い大寒の頃（一月下旬）に一～二頭の子グマを出産する。

交尾は六月だから二一〇～二二〇日の妊娠期間があるのだが、その子グマは想像以上に小さい。体重四〇〇g、体長二五cmしかなく、目は閉じ、耳は毛のない皮膚に覆われていて穴もない。毛はネズミのように短く、首も足腰も座らず立つことが出来ない。人間より未熟な状態で生まれる。



▲生後一日目の母グマと子グマ

顔じゅうが口と鼻というように、生まれたての子グマはヒグマの特徴を私達に誇大にして見せてくれる。それは発達した鼻と鋭いツメで、将来の最大の命をつなぐ重要な器官を示しているし、まだ歩けない体を引きずってツメで母グマの胸をよじ登り、独力で乳を飲み、強力なその吸う力で体をささえる。

母グマの出産は、子が小さいので軽いと思われがちだが、やはり大変のようだ。体をまるめ、かなりいきむ。四肢で立って中腰になり、お産が始まると子グマ以外はすべて次々ときれいに食べてしまう。お産前に作ったワラの巣には、血痕一つ残らず、子グマもきれいになめ、誠に美事と言う他はない。

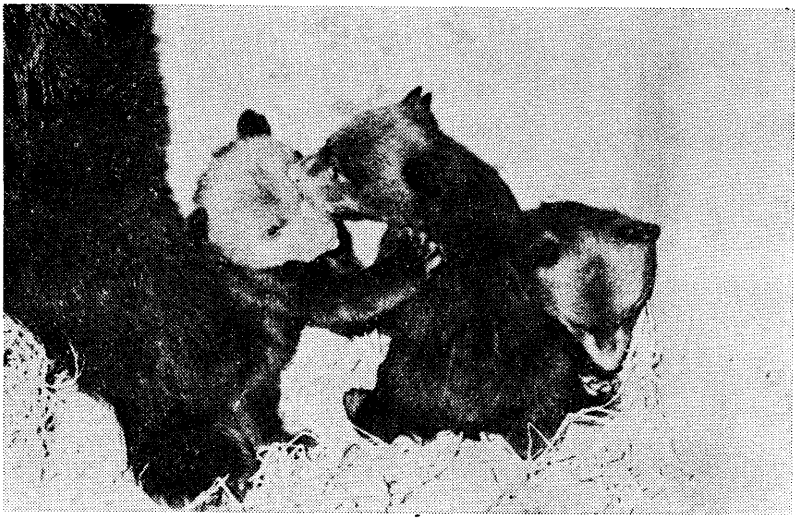
出産後すぐに母グマは、子グマを胸と腹の間に抱きかかえ、約一週間位は、ほとんど身動もせずじっと寝ている。子グマは、少しでも母グマから体が離れると火が付いたようにギャーギャーとなく。母グマは、子グマの排尿便をさせる時以外はひたすらじっと子グマをしっかり抱いて寝る。授乳間隔は、人間とほぼ同じ、三時間おき

に、子がなき、自力で乳房の所にはって行き、ツメでよじ登って吸い付く。母グマは、寝息やイビキをかいている事があるほどだから、このへんが人間と異なる。子グマは未発達の割に独力で行う。

子グマの排尿便は、特に生後一週間～二週間までは、母グマが、お尻をなめてやらないと出来ない。なめる事による刺激によってはじめて行うことが出来るので、人工哺育の場合も暖かい湯でマッサージをする。母グマは子の糞尿をすべて食べてしまうので、穴の中は春まで誠にきれいで乾燥している。勿論母グマは飲まず食わずで子育てを行うから、その間お乳は出すが、一斉排出はしない。この生命力の秘密、からくりはどうなっているのか、私達の最大の研究テーマの一つである。省エネルギーと言われて久しいが、いつも、ヒグマに接するとこの事を思い知らされる。

目も閉じ、耳も閉じ、首も座らず、四肢も立てなかった子グマも、生後四五日目頃から、それぞれの感覚器や、運動が発達してきて、ほぼこのあたりから全体的に一つの節目を迎える。三時間ごとに、ないては、おっぱいを飲み、ねむる、という生活から、少しずつ動き出し冬ごもりを終えて、春、母グマと共に穴から出る準備が始まる。まず耳は、初めしわが出来、その後そこから皮膚が落ち込みはじめて、穴があく。耳介に毛が生え出し、音によって動き、反応し出した事がわかる。目は、少しずつ開き出し、はじめは膜がかかっていて、ちょうど日光のように神秘な光をたたえているが、膜がとれると、瞳が輝き動く物に特に注目するようになる。

首が座り、四肢で立つようになった後、はいはいから、よたよたと歩行をしはじめるのは、生後二ヶ月たってからだ。驚いた事に、四肢で立てるようになる前から、動くものに対してはいはいをしながら前肢を振りあげる反射がみられた。よく言われる、ヒグマの前肢の一撃のパワーの凄さをみせつけられる。よく、牛や馬などの首の骨すら折ってしまうと言うこのヒグマの前肢の威力と瞬発力の速さは有名だが、これは、反射運動と言ってもよく、すでに生後一ヶ月を過ぎると歩行よりも早く



▲ 生後60日目

に現われるのだ。

歯は、針の先のような乳歯がやはり四五日目頃から、犬歯や門歯から出て、ちょうど離乳する六月までには、乳歯がすっかりそろう。運動も、徐々に活発になり、授乳間隔も開いてくる。生後二ヶ月もすると、子グマは母グマにじゃれ付いたり、兄弟がいれば、レスリングやすもうをしたり、母グマもおちおち寝てはいられなくなる。奥行三m幅一m足らず、二m以上も深い雪の中に埋もれた、小さな真暗な土穴の中で、体重二〇〇kg、体長一m八〇cmもある巨大な母グマと、小さな小さな子グマの出産と子育ての営みが、春まで繰り広げられる。

四月上旬～中旬、いよいよ冬ごもりを終え、日の光のもと外界に出る日がやって来る。その頃の子グマは、生まれた時のちょうど一〇倍、四kg程に成長し、まだ少々よたつく足取りであるが、母グマの後から十分ついて行く事が出来るまでになっている。

まだ母乳が中心だが、乳歯もはえて来ている。五月に入って、フキノトウや、ザゼンソウなどが沢地に芽を出

した草の芽や根など、少しずつ体をならしながら食べて行く母グマのまねをして、口に含んでみたり、じゃれてみたりして、覚えて行くようだ。六月に入ると乳歯がすべてはえそろう。山では、若葉が出てちょうど草は食べ頃となる。誠につよく出来ている。この頃には、離乳も完成しているので、母グマは毅然とした態度をとる。

一日、二～三回、授乳をする時は、子グマを十分に甘えさせ、じっくりと十分に乳をやりなめたりかわいがる。しかし、子グマが、勝手に飲ませると、まとわりつき、せがんだりする時は、容赦なく突き飛ばす。ひどい時には、前肢で三～四mもボーンと突き子グマは飛んで行ったほどである。やらない時は、絶対子グマがどんなに甘えても突き離すのだ。授乳回数を段々と減らして行くが、冬になって雪がまい降りる頃でも授乳している姿を目にする。これは、栄養をとるというより、母グマと子グマのきずなを深める心理的な作用の方が強い様に思えるのだが。野生のヒグマの場合は、再び、この母子は、共に冬ごもりをする。ヒグマの場合、研究が進むに従って、かなり個体差や、その時によって、子別れの時期は、様々の様子であることがわかってきた。一般には、二回、母グマと共に冬ごもりをした後、六月の発情期に子別れをすると言われてきたが、満二歳、時には三歳になって親と分かれる場合も報告されている。

飼育下では、満二歳の六月で妊娠し、満三歳で子グマを生む個体が半数近くいる。一般には、満三歳で妊娠し四歳で初めて子を生むと言われているが、これも、一年や二年のズレが個体によってあるようだ。

クマ牧場の場合、初めてのお産は、ほとんどの母グマは失敗してしまう。子を育てることが出来ず食べてしまう母グマが多い。しかし、二回目、三回目と経験を重ねることによって、子を上手に育てる。八歳～九歳が女ざかりと言ってよく、子も栄養状態もよく、良く育てる。高齢になると子は小さいようだ。

子育ては、ヒグマもやっぱり経験が大切なんだと、私自身力づけられたことである。

（のぼりべつクマ牧場・飼育課）

保育実習ノートから③

興味を示すあそびを通して楽しく文字が覚えられれば良いなと思った。

◆Tさんから K先生へ

二月二十一日（火）　はれ　　年長あお組

○じゃんぽかるたをしている時、子ども達の理解度におどろかされた。本当にとるのが早い。私が本気になっても負けてしまうほどである。取る方でひと通り満足すると、今度は読む方をやりたがる。ほとんどつっかえずに読める。しかし、ゲームの進行というところまではまだ十分に配慮ができず、自分が読み終ると、カードをまだ取っていなくても、どんどん次を読み出していってしまうことが何度かあった、「教える」のではなく、かるたの様に子どもが

○お弁当のあと、こうじちゃん、ようすけちゃん、数人に絵本を読んであげた、「きょうりゅうの話」であるのに、女の子もくいいる様な目をして見ていた。私もそんな子ども達の気持に答えたくて、読みながら話しかけたり、わかりやすく説明したりするように努めた。話を聞く真剣な表情を見ていると、「本を読んであげる」というところにも静的な子どもとの触れ合いがあるのだ、ということを感じた。

◆K先生からTさん

。自主充実保育の中で、どの子がどの位ことばを理解しているか、数量に関してはどの程度把握しているかを、先生がしっかりとわかっていないと放任保育になってしまいます。三十人いたら三十種類のカリキュラムが必要なわけです。

。絵本を読むのもクラス全体の子を意識して読みます。どの子にも聞こえるようにします。すると、一人、二人と関心を寄せて加わってきます。一人の子どもだけに没頭して読むと、他の子どものことがわかりません。先生を独占したい子は、「絵本を読んで」と言ってくることもあります。その子も絵本を通して、他の友達と触れ合えるよい機会になります。

◆TさんからK先生へ

二月二十三日（木）　雪のち雨　　年長しろ組

。お母さんのお迎えを待っているゆきこちゃんとあやとりをした。何度か取り合っているうちに〝ゴム〟をつくろう、ということになり、教えてあげた、どの程度の興味を示してくるかわからなかったのだが、考えていた以上に一生懸命で、何回も何回も練習して覚えてしまった。あの時のゆきこちゃんの嬉しそうな顔は今でも目に浮ぶほどである。子どもが自分から興味を持って取り組んだものには、想像以上の集中力が働くものだ、また子どもが様々な事に興味を持つことができる様な環境設定も大切であると思った。

◆K先生からTさんへ

「自己教育力」が、今更のように叫ばれています。幼稚園のように、低学年も総合教育になると、その目的も達成されるのではないかと思うのですが、教育の本筋を見極めたような文に共鳴しました。

◆TさんからK先生へ

二月二十五日（土）　はれ　　おひなまつり会

。今まで何回も練習してきたものが、あっという間に終ってしまい、ほっとした様な、さみしい様な、変な気持だった。実際に指導していらした先生方から見れば、ああすれば良かった、こうした方がよかったと、反省点があると思うが、子ども達は一生懸命やっていた、ごっこ遊びの延長でもあるかのようにたいして緊張もせずに、舞台で伸び伸びとせりふも大きな声で言っていた。私はあまり十分なお手伝いができなかったが、出番を待つ子どもや終わった子どもに一言、声をかけるようにした。

。子どもを並ばせている時に、目が合った子とニッコリほほ笑むと、子どもも安心してニッコリしてくれる、そんな時「言葉はかわしてないけど、目と目で心が通じたのかな」と思い、嬉しかった。言葉だけでなく「みんなを見ていますよ」と言った暖かい目を常に子ども達に向けていたい、と思った。そして今日は何気なく合った目と目だけれども、これからは一人一人の目を見つめていきたいと思った。

＊　＊　＊

子どもたちのこと ①

大橋利恵子

世の中には実にいろいろな人間がいる。一人として同じ性格や同じ生活環境の人間はいない。然るに子供を観る時になると、発達過程という名のもとに「子どもとは、このようなもの」という見方になってしまうのは、何故なのだろうか。大人一人一人が違うように子どもだって一人一人個性もあれば、生活環境も違っているはずである。

その個性をより的確に理解しようと保育者が思った時、おのずとそこには限界が見えてくる。大人同士の間でもなかなか理解し合えないのだから、まして、保育者と子どもでは無理ないともいえる。しかし、それでもなお保育者がその子を一個人として大切に見守れるのなら、また、大人の「こうあるべきだ」という勝手な尺度を捨てて、その子に向かえるのならば、そこには目に見えぬ力が働いてくるであろう。そして、そこに感情が行きかうのなら、なおさら、理屈ではない何ものかが生まれ、大人同士より、より豊かなものを感じられるはずである。

そんな幼児とのかかわりをしたいと願いながら、毎日の生活では悔むことやわからないことばかりである。でも、ともかく、その子の世界を計り知りたいと思う心に乗じて、私の周囲の子ども一人一人について語ってみたいと思う。それにより、より子どもと近くなれることを願って……

A男のこと（五才　男子）

列にならぶ時、身じたくをする時等、何か決めたように行動しなくてはならない時に、いつも遅くなる子はだいたい同じである。その中に必ず入っているのがA男である。どうしてかなと思って様子を見ると、

例えば、朝。制服に制帽で登園して来るので、そ

れをロッカーに掛けるという仕事がある。A男はカバンをかけるとすぐに友だちの所へ行きおしゃべりをしてくる。そして、しばらくして、帽子を置くと、次に既に遊び始めている子どもの所へ行き入りこむ。そして少し経つとおもむろに制服を脱ぎ掛けに行くのである。やってできないのではないけれどなかなか自分でさっさとやらないのである。

母親に、家庭での様子を聞くと、兄、弟二人の下の子なのでついついやってあげることが多いとの返事に「さもあらん」とうなずける。それでもそういう子どもはよくいるもので、大抵、根気に声をかけていると、いつのまにか出来るようになってくるものである。A男の場合、言われても言われても、相変わらずの所があり、腹が立つやら困るやら……「制服のまま遊ばない方がよい」と言うのをやめてしまえばそれでいいわけなのだけれど、「年長の二学期にもなって」と思うと、いつのまにか頭に血がのぼってしまっているわけである。

そんなA男だから、友だちに対してはやさしい面も持っている。なかなか一人でいろいろなことができない女児の手伝いをしてやったり、泣いている子の所に行って声をかけたりしている姿をよく見る。また、人を笑わすことが好きで、おもしろいことを言ってはよく自分も笑っている。

先日も、じゅず玉、どんぐり、短かく切った色付きストローなどを糸に通して、思い思いの首かざりを作っていた。教師も一緒に考えて、中央にどんぐりが三コくるように、じゅず玉、ストロー等を配置して首かざりを作っていた。きれいにできたので、首にあてながらみんなに見せて「にこ」と声を発した。とたん、A男が中央に入れたどんぐりを指さしながら「さんこ」とさけんだのである。一瞬、静かになり、後は大わらい。本人はただ、にこにこしているのである。この性格の明るさが、毎日くりかえし注意されても平気でいられるゆえんなのかなと思ったりする。いずれにせよ、こちらの都合をあまり押しつけず、A男のやさしさや明るさを伸ばしていかなくてはならないと心する次第である。（岐阜北幼稚園）

宗教人類学からみた子ども ④

感覚の話

関 一敏

1

一九八〇年二月、ベルギーワロン地域（フランス語圏）の一小都市にカーニバルを見に出かけた。祭に参加する旧市街の人口約一万をかかえる中世城砦都市バンシュである。この町は十六世紀来のカーニバルの伝統を誇ることで著名であり、とりわけ小都市ながら大規模の「国際カーニバル・仮面博物館」の運営でよく知られている。祭の形式としては、大都市のカーニバルにみられるような観光化を拒むという頑固な姿勢をくずしていない。その年の祭暦では二月二〇日の灰の水曜日前の三日間（二月一七日～一九日）を祭の主要な日程においていた。なかでも一九日の火曜日はマルディ・グラとよばれるカーニバルの頂点（と同時に終焉）にあたっていて、その日

ばかりは人口が約一〇倍にふくれあがる。

バンシュのカーニバルを調査して歩きながら、祭祀集団の年令階梯制や一五の中心集団がたどる祭の空間構成を考えるうちに、祝祭と感覚のかかわりについて具体的な手ごたえのようなものを感じた。この手ごたえの由来は、のちに「祭と記憶」という名の報告書をまとめる段階になっても、五年になろうとする現在の目からもさほど明確とはいえない。比較的いってしまってよさそうに思えるのは、祭一般やカーニバルにいだいていた理論的イメージをバンシュにあてはめようとする時に、いかんともしがたい不整合の生じてしまうことだった。デュルケムの聖俗論や集団沸騰論という祭の古典的図式を背景に、禁制にとりかこまれた「形式性」の段階と禁制をとりはらう「乱痴気騒ぎ」の段階を時間軸上のドラマ的構成にふたつながらに認めたのがリーチの祭論だった(「時間の象徴的表象に関する二つのエッセイ」『未開と文明』平凡社、一九六九年)。

この思いきり抽象化されたモデルでバンシュを考えてみると、三日間のカーニバルはまるで全体が「形式性」ひとつにとりこまれてしまうようにもみえ、日常性の転倒などという魅力的な唄い文句は祝祭論者の夢ではないか、とも思ったのである。たしかに「乱痴気騒ぎ」にあたる局面が祭の流れに見出されぬわけではなかった。マルディ・グラを終点とする六週間の準備日程のなかには「夜の牝豚」とよばれる一夜が設けられていて、死神や怪物の仮面、白いシーツやグロテスクな衣裳を身にまとった群れが思い思いに広場に出現する。一九八〇年の祭暦では二月一一日におかれていたこの「仮面の夜」には歴史的変遷があり、第一次世界大戦前まではマルディ・グラ前の三、四週間に出没していた仮面が徐々に日程を縮少されて、現行の一晩の行事に凝縮するにいたったのは第二次大戦以後だという。とすれば比較的長期にわたる「乱痴気騒ぎ」の局面からマルディ・グラを頂点とする「形式性」の最終局面へのシナリオ的展開をそこに復元することもできないわけではない。そのさいに「乱痴気騒ぎ」の縮少傾向に二〇世紀的な規律性ないし公式性

の強化を読みとり、祭の形骸化を嘆いてみせることも不可能ではない。

けれども少くとも現在のカーニバルが現実に住民たちの社会的経済的支持のなかで年々施行されているという単純な事実や、何よりもマルディ・グラに示す主人公たち（ジル）の形式に縛られながらの祝祭的雰囲気のありかは、こうした祝祭衰退論からは説明のつきにくい部分である。先ほど「形式性」にとりこまれた局面とのべた二月一七日（日）から一九日（火）の三日間は、祭の登場人物を包囲する禁制や規律の支配下にありながら、同時にハレがましい祝祭性を発揮しているようにみえる。しかもそれは「形式性」と対照的な「乱痴気騒ぎ」の形態をとるのではなく、禁制や規律といった形式的側面の強化が同時に祭の開放的気分を生むという不思議なありようを示している。このありようを祭の日程行事に則して説明する余裕はないので、結論めいたものだけをのべておこう。

一五の祭集団のうち「大人」のバンシュ住民からなる一〇のジル集団の動きに注目すると、彼らの登場する日曜日と火曜日の二日間の行事には共通点の多いことがわかる。とくにそれぞれの午前中の集団ごとの群れの形成から最後の広場での解散にいたる過程はほぼ相似形をなしている。違いがあるとすれば、それはマルディ・グラ（火）がディマンシュ・グラ（日）の行事の性格を拡大もしくはいっそう極端化したところに成立していることである。いっぽうで衣裳や所作の約束ごとといった規律的側面が日々の生活のきまりをはるかに越え、日曜日の規律をも極端にひきあげてジルたちをいわば縛りつけている。ところがいっぽうで、禁制の拡大と比例するかのように巡回時間の拡大、巡回空間の拡大が火曜日を特徴づけている。そして何よりも、感覚の拡大とここで名づけておきたい動きがそこにみられることに注目したい。具体的にいえば、太鼓・木靴の喧騒にジルのもつ大小の鈴の響きが呼応すること（聴覚）、広場や衣裳の飾りつけ・色彩の増加（視覚）、採物やオレンジ投げ、群衆の増加（触覚）といった感覚的要素が行動的規律の強化のなかで

拡大をはかる運動を示すのである。祝祭性の由来は少くともここでは、こうした感覚の拡大運動とのかかわりでとらえるべきではないか。これがさしあたっての結論めいた視角である。

2

五感の宗教（人類）学なるものが成りたちうるのかどうか。それも現実にさまざまな形態をとる宗教的現象をより深くとらえる実践的方法としての意味をもつものかどうか。この問いが背後にかかえているのは、現在をふくめて歴史的に「宗教」とよばれてきた現象をおしなべて感覚とのかかわりにおいてとらえ返した場合、そこに感覚を拡大する試みの歴史が脈々と流れていることへの一種の期待感である。かりにこの期待感に現実性があるとすれば、加速化するメディアの膨張と個々人の生活感情がいよいよ乖離せざるをえない「近代以降」の時代にあって、これまで「宗教」とよびならわされてきた人間的現象がはたしていかなる形を帯びるかについて何らかの見通しが成りたつに違いない。少くとも現在、大部分の人間にとってはフィルムや体験談によってしか知ることのできない宇宙飛行士の視覚体験が体験者の「宇宙からの帰還」にいかなる宗教性を強いてきたかは、立花隆のよく語るところである（『宇宙からの帰還』中央公論社、一九八三年）。「宇宙飛行士たちの宇宙における認識拡張体験の話をくり返し聞いているうちに、私は、宇宙飛行士とは、〝神の眼〟を持った人間なのだということに思いあたった」（同五八頁）。

視覚体験の非日常化、視覚の拡大というテーマはカーニバルや宇宙飛行に限らない。これまでのべてきた聖母出現もまた、不可視の何ものかを見てしまう点で、体験者の視覚が拡大されているのである。他の人々には聞くことのできない聖母の声をきく体験は聴覚の拡大であり、芳香といった嗅覚的要素、空中のホスチアを口で受けとめる味覚の要素も聖母出現例にはさまざまな組みあわせで現われている。

出現例（カッコ内は体験者の年齢）	視覚	聴覚	嗅覚	味覚	触覚
一八三〇年　パリ　女（24）	○	○	○	×	○
一八四六年　ラ・サレット　男女（11・15）	○	○	×	×	×
一八五八年　ルルド　女（14）	○	○	×	△	×
一八七一年　ポンマン　男女（9～12）	○	×	×	×	×
一九一七年　ファティマ　男女（7～10）	○	○	○	×	×
一九三三年　バンヌー　女（11）	○	○	×	△	×

この表は各司教区の肯定的評価を得て、出現を発端とする聖母巡礼地を歴史的につくってきた六つの事例をとりあげたものである。出現体験において何らかの役割をはたした感覚的要素を下の欄に印で示した。味覚の項目は、ルルドの泉と雑草、バンヌーの泉というように聖母そのものとの知覚関係ではないので△印を付けた。表をみてわかるのは、五感のなかで「見る」ことと「聴く」ことのもつ役割の大きさであり、他の三つの感覚体験はこれに付随して登場することである。視覚と聴覚が他者とのコミュニケーションにおいて主要な機能をになうことは、もちろん日常の生活でも実感できることがらである。ここで二つの感覚にとりたてて注目するのは、「見る」宗教体験と「聴く」宗教体験を類型的に区別する宗教学的試みがかつてなされたことによる。

3

オランダの宗教現象学者C・J・ブリーカーに「眼と耳――その宗教的意味」という奇妙な題名の論文がある（C.J. Bleeker, "L'Œil et l'oreille" in *The Sacred Bridge*, Leiden, 1963）。ゼーデルブロム、ハイラーらによる「神秘的信仰」と「預言的信仰」の二類型を感覚の側面から、つまり「眼」と「耳」による二つの宗教体験としてとらえなおす試みである。ブリーカーは聖テレサの例をひきながら、その語彙には神に直接対面する歓喜の叫びが響きわたっていること、真の神秘家の条件として「至福のヴィジョン」という視覚体験への希求をあげて

いる。「神秘主義は感覚のカオス世界を細分化してしまった状態からの脱出をのぞむ。神秘的志向の歩みは測りしれない空間への飛行もしくは跳躍であり、そこではすべての概念が意味を失なう」（同六七頁）。いっぽう預言的信仰は耳によって神と交流するところに特色がある。聖パウロは「ローマ人への手紙」で次のようにいう。「信仰は聞くことによるのであり、聞くことはキリストの言葉から来るのである」（一〇：一七）。この信仰類型は神のメッセージを伝え広める人物、神の言葉の伝達に召命を得た人々にその起源をもっている。たとえばユダヤ教的伝統ではヤーウェは顔を見せぬ存在として理解される。選民の王モーゼが見たのは通りすぎる神の後姿だけである。十戒のひとつは偶像崇拝の禁止、すなわち神を視覚化することの禁止だった。新約聖書もまた、基本的には聴覚による信仰の世界である。「神を見る」ことが比喩的な表現でないとすれば、それはキリストの再臨する終末のヴィジョンに限られるからである（同六八―九頁）。

ここで先ほどの聖母出現の表をみてみよう。いずれも不可思議な女性が眼の前に現われて、何らかの方法でメッセージを残すことは共通している。このうちポンマンの聴覚の項目が欠けているのは、メッセージの伝達が発話（耳）ではなく文字（眼）媒体によってなされたからである。またパリ・バック街の出来事は他とは異なる展開を示している。この事例だけが「大人」の「修練女」による「修道会内部」での聖母体験だったことばかりでなく、この出来事が世に知られた発端は、聖母の命によるメダル鋳造が出現譚なしに病治しの信仰を民衆にひきおこしたことにあった。体験者に現われた聖母はうつべきメダルの表と裏の図柄をみずから視覚化して伝えたのである。

これらの事例にブリーカーの類型論をあてはめることはできるだろうか。その二元論は「視覚」の極に「すべての概念が意味を失なう」「感覚のカオス世界」の体験をおく一方で、「聴覚」の極には概念化された「神の言葉の伝達」という使命を配していた。いずれも少数者に

のみ可能な神的存在との交流を、感覚を媒介としながら通常の感覚を超えたところではたしていること（感覚の拡大）に変わりはないのだが、いっぽうの前概念的カオスは他方の概念による伝達と相容れない性格をおびている。聖母出現の出来事は、ところがその双方をかねそなえているようにみえる。

4

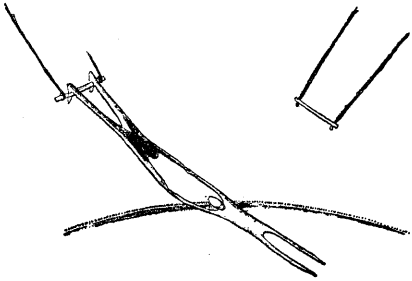
聖母出現のもつ神秘的側面と預言的側面の関係には、じつのところ不明な部分があまりに多い。この問題を正面から論ずるには、次の二点をおさえなければならない。①出現体験と他の神秘体験の位置関係（たとえば佐々木宏幹は「霊的存在を外側にして目で見、言葉を交わすなどして交流すること」ならびに「霊的存在の意志または力を五感にうけつつ交流すること」を二つながらに「霊感」とよび、「霊的存在がシャーマンの自己と入れ替わって第一人称的に言動する」「憑入」と区別している。『憑霊とシャーマン』東大出版会、一九八三年、vi～vii頁。とはいえ問題は「憑入」と区別された「霊感」の二類型をさらに区別する方法的意味にかかわるものだった）。②近代聖母出現群という類型的表象のもつ宗教的相対性（近代聖母出現を一群のサイクルとしてひとまとめにとらえる視点そのものが一社会表象にすぎないという可能性。たとえば終末論的預言を特徴とするラ・サレットとファティマの出現は、聖母そのものとの出会いとそれにまつわる病治し等の奇蹟的事象に重点をおく他の出現例と区別されるべきではないか、など）。

さしあたりいえることは、まわりまわった挙句に次のようなことだけである。一九世紀カトリシズムが政治・経済・社会の領域とともに広汎な民衆運動の興隆を経験してきたことは、聖母巡礼運動の広がりによく現われている。しかも巡礼の組織化以前に、聖地誕生の発端となった聖母出現の出来事そのものが体験者をとりまく民衆の参加によって支えられてきたことに注意したい。これはたんに聖母のメッセージを受容した人々が、教会や他の制度に社会的勢力として働きかけたことをいうのでは

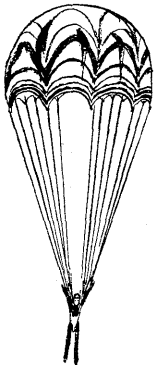
ない。前に略述したルルドやポンマンの群れがよく示すように、出現というアモルフな体験そのものに意味を与え、聖母という、民俗から社会にまたがる潜在的表象をそのつど歴史の場に構築してきた事実をいうのである。とはいえ、聖母体験者が、解釈する主体としての群れのなかで、たんなる狂言廻しの役割を負っていたというわけではない。聖母出現が、ということはつまり「他界」との交流が、抽象的な理念としてではなく、一定の時間に特定の場所で行なわれていることが具体的に信じられるためには、眼と耳でこれを知覚する感覚の拡大者が介在しなければならなかった。そこにはカーニバルについてみたように、解釈する言語形式にとり囲まれながらの祝祭状況が発生するのである。

つまりこうである——少くともラ・サレット以降、この世の民衆とあの世を結ぶ感覚の媒介者は子供たちがその役割をになってきた。フォーク・カトリシズムにおいて、いわば「他界」との交流を願望する民衆の集合体は「子供」という感覚器官を身にそなえていた。子供の不定型な感覚体験は、これを包囲する大人たちの言語形式や宗教形式との緊張関係のなかで「他界」の祝祭性をもたらし、そこに新たな聖地をうみおとしてきたのである。

（筑波大学）



近代短歌に現われた子ども（二十三）



大塚　雅彦

（43）未亡人の歌

未亡人という語はもとは中国の故事に出で、つまり『左伝荘公二十八年』にもとづく熟語で、夫に死におくれた身ということを卑下したのに始まるが、その後、「そういう境遇の女性を他から呼ぶ一般的な呼称」になったらしい。私はあまり好きな語ではないが、他に適当な用語もない（寡婦、後家（ごけ）などの語もあまり芳しくない）ので、世間では何となく使われているのであろう。

ところでわが国ではどの位の数の未亡人が居るのであろうか？　官庁や関係団体などの白書や統計資料を見ないと正確なことはわからないが、後述の『この果てに君ある如く――全国未亡人の短歌・手記』を見ると、「あとがき」に「わが国

の未亡人の総数は、厚生省の推定によれば約百八十万といわれている」とあり、またこの本の短歌の選者をした窪田空穂は序文の冒頭で「現在未亡人と呼ばれる人が二百万近くもあり、その三割の六十万は戦争未亡人だと聞き、言い難い感がする」と述べている。今次大戦は多くの未亡人をつくった。不幸にも戦争によって最愛の夫を奪われた彼女たちは、亡夫の忘れがたみである子どもを抱えなどして、どのような生活をその後続けたのであろうか、それを思うと私はまことに「言い難い感がする」のである。いま、その未亡人たちによって歌われた子どもを瞥見しよう。

(イ) 森岡貞香『白蛾』

森岡貞香（さだか）は大正八年松江市生まれ。昭和九年「ポトナム」短歌会に入り小泉苳三に師事、翌年山脇高女卒業。十九才で結婚したが夫は間もなく出征する。昭和二十一年夫は中国より復員したが、四月夫は急逝、若い未亡人となった。二十四年「女人短歌」創刊に参加。その後、三十二年「ポトナム」退会。同人誌「灰皿」「律」等を経て、四十三年、歌誌「石畳（いしだたみ）」を創刊して今日に至った。歌集は『白蛾』(昭28)『未知』(昭31)『甃』(昭39)、『珊瑚数珠』(昭52) 等がある。

『白蛾』は彼女の第一歌集で、短歌雑誌連盟賞、世評高き一巻であった。夫との間に遺された一児（男）をかかえ、「病弱の子持ちの寡婦」と自ら詠んだように病身である自己をきびしく見据えながら、荒い時代の中で成長してゆく愛児に熱いまなざしを注ぎ、情感や官能をも潜ませつつ、鋭く生の不安や心の蕩揺を詠出している。

①拒（こば）みがたきわが少年の愛のしぐさ頤（あご）に手触（たふ）り来（く）その父のごと

②あまえよる子をふりほどきあひし眼のぬるめる黒眼よつと捕はれぬ

③月に照り枯生のやうな古畳さみしき母と坐らぬか子よ

④月のひかりとなりし畳に子を招（よ）べば肢影ながく曳き少年は来ぬ

⑤つくづくと小動物なり子のいやがる耳のうしろなど

洗ひてやれば

⑥蠟の灯にまろく照らさるる少年いましふくよかなれば生きたしわれは

いずれも歌集『白蛾』より抄いた。作者の歌はみずみずしい情趣に溢れ、ゆたかな感性から発する繊麗な描写や、鋭角的感覚的な把握にすぐれ、豊潤な才質をはげしくぶつけるような甘美な作品を造型する点に特色がある。いわゆる未亡人の歌ということから想像されがちな自己限定的なものではない。①の「頤に手触り来」、②の「ぬるめる黒眼」、③の「枯生のやうな古畳」、④の「肢影ながく曳き」、⑥の「蠟の灯にまろく照らさるる」等、いずれも生々しい感覚的表現であり、魅力的である。⑤に述べているように自分の胎をいためた男児を生き生きとした小動物のように見ており、古風な母情といったものから解放されて新鮮な母子像を呈示し、それでいて、この愛児を通じて亡夫のしぐさをオーバーラップさせており、しかも③のようにやや古典的な静謐さも湛えている。従来の未亡人とその子ども、といった発想を超えたユニークな作風ではあるまいか。

(ロ)『この果てに君ある如く』

雑誌「婦人公論」は昭和二十四年秋から全国の未亡人に呼びかけ、彼女たちの生活の現実に取材した短歌と手記を募集した。集まった作品は短歌が五九二人の約四二〇〇首、手記は三七三人の約三九〇篇に及んだが、それらを各四名ずつの選者を依嘱して選してもらい（短歌の選者は空穂・茂吉・迢空・善麿）、優秀作品は翌二十五年一月号から三月号に至る誌上に発表した。そして、その掲載された作品全部を作者別にまとめて二十五年五月単行本として中央公論社から刊行した（五十三年八月「中公文庫」にも入れられている）。それが『この果てに君ある如く』である。前述の如く「全国未亡人の短歌・手記」というサブ・タイトルがある。企画者がいわゆる「戦争未亡人」だけを対象にしたものとは思えないし、応募者も「戦争未亡人」に限られたわけではなく、一般の未亡人も含まれているようである。しかし終戦数年後という時点で募集されたことを考慮すると、かなり多く

の今度の戦争によって夫を喪った未亡人が応募者の中に含まれていたと思われるし、そうでなくても敗戦直後の生活の経済的、精神的苦しみを人一倍負っていたと思われる未亡人たちの体験や思念が色濃く詠出されていると見てよいであろう。ただ、一般応募作品であるから、森岡貞香作品のように文学的な質の高さを見出すことは困難といわざるを得ない。短歌を若干抄出してみよう。

①うとましき夢よさむれば吾児ねむる吾児と浄らに生きざらめやも（愛甲葉子）

②吾子にすらうとまるる日は家のこと皆なげうちて死なむと思ふ（井倉信子）

③さびしげに父の写真を見つめゐる吾子に悔起る折檻のあと（石田シゲ子）

④汝のために無我夢中なる母われの祈りも知らずこの稚さよ（岩崎英子）

⑤誇らかに吾が母ぞとぞ友に告ぐる吾子よ嬉しもこの母をすら（潮井ゆふ）

⑥一心に虫を追ひゐる子が姿母のむほんは許さざるべし（大島妙子）

⑦わが膝にのぼりて下りず末の子はひと日われ待ち耐へたりしかも（倉橋とし枝）

⑧昂ぶりてもの言ふ吾子に真向ひてひそかに思ふかくありし夫よ（佐藤松子）

⑨ぞうすゐの腹すく早しとあはれわれ子等に早寝のくせをつけたり（鈴木秀子）

⑩父なくて生ひゆく吾子と思ひつつ髪を切りやる項のいとしさ（藤沢典子）

⑪戦死せし夫がかたみの子のあれどわがもてあますこころのもだえ（堀井みち枝）

⑫家族おほき家の起きふしおのづから子を叱ることの多きをかなしむ（宗広マサ子）

⑬吾子が名を呼ばはり給ふ御声さへ聞ゆる如し夫生れし家（村松泰世）

いずれも歌意明白なので多くの説明は要るまい。子にすらうとまれて時に自死をおもふ人、子を折檻しすぎて悔む人、自分を〝母〟と友に子が誇らかに告げ居るのを

喜ぶ人、時に燃ゆる女としての心のほめきや情炎を子のために鎮めようと堪える人、子のもの言いやしぐさが亡夫そつくりなのに胸を突かれる人、子に食物を充分に食べさせてやれないのを歎く人、多人数家族の中での生活でつい子を叱るのが多いのを悲しむ人等々——実にさまざまである。借問す、これらの未亡人諸姉、今なお健在なりや。而して、この母たちにより育てられし幼兒ら、心直く且つ慧敏に人と為りしや否や。

(44) 原爆の歌

たひらぎの祈りの中に広島のかなしみの
日をまた思ひいづ　　山本康夫

かの日わがいのちを生きし記憶さへまざ
まざと暗し八月六日　　古川春子

毎年八月六日になると私は広島のあの原爆の日を思い出す。あれから三十九年、歳月ははるけく過ぎた。広島は惨禍の跡も見つけ難いほど復興し、人々は平和と繁栄をたのしんでいるかに見える。しかしあの魔の遺産はあまりに大きく、医学的にも未解明な放射線後障害に今も苦しむ人々が居り、高齢化しつつある被爆者の苦しみや不安は大きい。昨年七月二十八日の朝日新聞の記事によれば、被爆者を対象にしたアンケートでは、彼等の八割が「原爆によって身体が悪くなった」と回答し、九割が将来の健康、暮らし、老後などに不安を訴えているという。また原爆で肉親を失った人たちの悲しみや歎きは未来永劫尽きることはあるまい。

巡り来し八月六日汝が欲りしものみな今
はありて切なし　　越智紋子

大人はもちろん、多くの子ども達が一瞬にして生きながら殺され、あるいは身体がただれて日に日に死んでいった。こんにち物資が溢れ、人々が生活を楽しむ日が訪れても、無辜のこの子ども達を蘇らせて生きる喜びを味わわせてやるすべもない。

早く昭和二十六年十月、広島の少年少女たちの手記を集めて世におくつた名著『原爆の子——広島の少年少女のうつたえ』という本がある。広島の小・中・高校、大学等の児童、生徒、学生たちが、原爆投下の惨状やこの

地獄を見た驚きやかなしみを綴っており、編者の長田新博士が序文で述べているように「世界中の誰も体験しなかった人類史上最大の悲劇と惨禍とを、身をもって体験した広島の少年少女たち」が「全世界に訴える」思いを刻印しているかのようである。しかし私は今、それから三年後の昭和二十九年八月、「歌集廣島編集委員会」の手によって編さんされた歌集『廣島』をとりあげてみよう。これは当時「広島にあるすべての歌の団体が手をつないで」協力し、多くの広島市民たちから募集した原爆短歌作品を集録したものである。尨大な数の歌の中から、特に子ども達がこの原爆によってどのような惨苦を蒙むったかを指摘してみたい。

①窓べりに八月六日の陽を浴びて子をあやしゐし
　休日なりしに　　（井上清幹）

こんな何気ない日であった。無気味に飛行機が飛んでいたが、人々はさして気にもとめなかったという。悲劇は一瞬に来た。

②教へ児ら畑耕せるたまゆらに閃光過ぎて地鳴り
　とどろく　　（斎藤哲子）

閃光と共にこの世の地獄図絵は訪れた。

③火ぶくれになりて裸に倒れゐる処女水欲る吾が
　足つかみて　　（内田英三）

④焼けただれ盲となりし幼子が母の名呼びて
　さ迷ひをれり　　（大沢張夫）

⑤死体浮くプールの水を貪り飲む女子学生のやき
　腫れし唇　　（川手亮二）

⑥おしの子が盲の親の手をひきて逃げまどひきぬ
　火の海の中　　（小阪茂子）

⑦こと切れし母とも知らずその乳をまさぐるよ
　この盲ひたる児は　　（河野淑子）

⑧ボロのごと火傷の皮膚は垂れ下りなす術もなく
　さまよふ少年　　（佐々木克巳）

⑨母ちやんと絶叫しつつ少年がはだしで炎の中を
　走れり　　（竹下和孝）

⑩我が母と思ひて乳を吸ひつくしねむりぬ頬に
　穴のあきし子　　（辻桝良江）

⑪重傷の一団の中の透るこゑいまだ幼し母と
よぶこゑ　（中川雅雄）

⑫原爆にてプラットホームより飛ばされし弟は
少し馬鹿になりたり　（新田隆義）

⑬風呂敷を引き裂きひきさき括れども吾児の血汐は
噴きやまなくに　（長谷川精作）

⑭虚空つかみ熱いよ熱いよと少女のこゑ呪ひの
ごとく日蔭なき街　（深川宗俊）

⑮生き乍ら身体焼かれて帰り来し子をほめやるも
いまはのきはに　（山本紀代子）

身体を焼かれ、ただれ血を噴き、水や乳を欲り、親を求め、絶叫する子ども達。そして次の如く累々たる死体。母子共にこと切れ、師弟共に黒焦げになった童達。

⑯親呼びて叫びたらむか口開けしまま黒焦げし
幼児の顔　（中邑浄人）

⑰子を抱き坐りしままの姿勢にて黒こげとなりし
母も居たりき　（白鳥きよ）

⑱帰り来し妻は答へず泣き伏して抱ける小箱を
われに差出す　（益田礼助）

⑲子がむくろ手押車に結びつけわれと妻とが
こもごもに押す　（山本康夫）

⑳あふ向きに死にし童女よしづかなる双のまなこを
見開きゐたり　（横山　靖）

㉑大き骨は先生ならむそのそばに小さきあたまの
骨あつまれり　（正田篠枝）

次のような作もある。非情のようだが、この親の気持も切羽つまったものなのだ。

㉒水筒の水乞はるるを恐れゆく瀕死の吾子に
残さむとして　（山本康夫）

ケロイドの顔を笑う次のような児も居るが、子どももさまざまだ。

㉓町ゆけば我が顔を見てあざ笑ふ心なき子らに
涙わきいづ　（尾形静子）

㉔火の街ゆ赤子助けて来し少女炒り米噛みて
含ましめ居り　（加納節尋）

㉔のようにうつくしい人情を発揮する少女もあるの

だ。こういう修羅場で出産する母親も次のように居て、人間の生命の神秘は不思議なものだ。

㉕爆撃をうけし刹那の衝撃に月の足らざる子が
生れたり　（中原仁市）

㉖空襲の合図と共に生れ出し吾子板の上にその
ままにあり　（平野美貴子）

子を死なしめた親の慟哭と断腸のおもいは

㉗焼死せし児が写真の前にトマト置き食べよ
食べよと母泣きくどく　（正田篠枝）

㉘勝つまでとお粥代食たべさせて死せし我が子の
霊にあやまる　（福田栄代）

と続き、それは次の如き悲痛な思いに極まっている。

㉙吾子のごと原爆にあひて死にたしと思ふ日ありて
恐るものなし　（山本紀代子）

日を経ても歎きは深まるばかりである。

㉚一望の焼野が原を子を索めさまよひし日の
歎かひ去らず　（上野夕穂）

㉛誰彼の死したる噂子とせしがその子もいまや
死にてしまへり　（高橋武夫）

㉜しみじみと湧くさみしさよ爆死児の小さき
位牌に灯をともしつつ　（松村松風）

㉝あれちのぎくしげり生ふ日の魂まつり吾子の名
よびてうづくまりゐる　（新田みどり）

㉞汝れに似しゆきずりの娘の臨終にし水あたへし
がいたく鮮し　（　同　）

万斛のうらみは、まことに世々を経ても尽きず、魂祭に流す精霊舟に乗せられて幽魂はいずこを指して行くのであろうか？　私はこうして書き記して来た歌々を、幾たびも読むに堪えない思いがする。私は戦後幾たびか広島を訪うた。そのたびに公園に行き、あの不戦の誓いの碑の前に立ち死者の鎮魂を祈念し、次いで、千羽鶴に蔽われた峠三吉のあの「人間を返せ――」という有名な詩碑にぬかづいた。そして、三吉と一緒に、親を返せ子を返せきょうだいを返せ友だちを返せ人間を返せ、と叫びたい疼きのような衝動に駆られて佇立していたのであった。

（お茶の水女子大学）

三月、巣立ちのとき。北の国では、雪の下から久々の大地が温かな顔をのぞかせ、南の地方では、早咲きの桜が枝々を淡く彩るこの季節は、子どもらを送るのにふさわしい時機といえるのかも知れない。

しかし、幼稚園から大学まで、それどころか、官公庁、銀行、一般商社やデパートまで、三月から四月へかけて一斉に年度を改めるとは、考えてみれば何と徹底したお国柄であることだろう。そして、私どもは、いつか、このことの自明性を問おうとすらしなくなっている。遂、この間、大掃除やら古ものの始末やらに忙殺されつつ、暦の年号を改めたばかりだというのに……。私生活の暦と、公生活の暦との、ものの見事な共存というべきであろうか。

公的な暦の統一を推進したのは、いうまでもなく、明治以降の近代化の動きであろう。幼い子どもに限っていえば、満六才の四月には、いや応なしに小学校に入学しなければならないという生活暦が、がっちりと個人を絡め取ったということになる。そして、それに合わせて、幼稚園の入園と卒園も、明確に区切られることになった。夏の水遊びをもう一度経験したいから九月に卒業したいとか、お正月から気分も新たに小学校生活を始めたいなどという、個々人の心情は、公的な学校暦の中に介入の余地もないということだ。

こうした画一化が、わが国の公教育を効率化させ、一定の水準を保たせてきたことは確かであろう。しかし、と同時に、たくさんのものを抹殺してきたこともまた、疑うべくもない。現在、自明と見えることの背後に、無数の葬り去られた可能性がうごめている。私どもは、折ある毎に、それらを思い返さねばならないのではないだろうか。

(H)

幼児の教育 第八十四巻 第三号
三月号 ©
定価三〇〇円
昭和六十年二月二十五日 印刷
昭和六十年三月一日 発行
東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行人 本田和子
東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所 日本幼稚園協会
東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所 図書印刷株式会社
東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所 株式会社 フレーベル館
振替口座東京九—一九六四〇番

⊙本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

新時代の音楽絵本誕生！

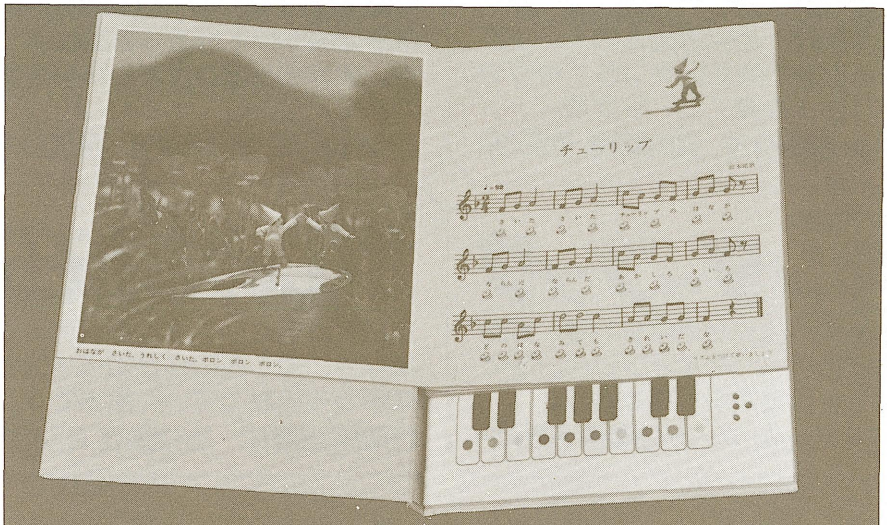
IC ピアノつき

とんぼの めがね

A４判
定価3,000円

ひいてうたえるピアノえほん

全9曲入り



この本は、楽しみながら、自然に情操教育ができるように作られたものです。

三大特長

ピアノと絵本の組み合わせ

美しい音色のＩＣピアノをひきながら、ファンタジックな写真が楽しめる、ピアノと絵本を組み合わせた絵本です。

色でわかる音符

音符には、それぞれの音の鍵盤と同じ色の色つきのおたまじゃくし(♪)がついています。

持ち運びが簡単

外形はふつうの本と同じですから、簡単に持ち運びができます。いつでも、どこでも、みんなで手軽にリズム遊びや歌を楽しんで下さい。

すいせんの言葉

この「ＩＣピアノえほん」は美しい絵を見ながら、曲をひいてうたうことができるように工夫されているため音感教育の教具・遊具として最適です。子どもの聴覚と、視覚と、細かい運動機能の三つを脳で連分しながら楽しむことができるので、脳の発達を助けるのに大いに役立つものです。無限の発達の可能性をもつ幼児に、ぜひこの絵本をお推めします。

日本小児科医会会長
愛育病院名誉院長
元・愛育研究所所長
内　藤　壽七郎

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292 7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館

フレーベル館の8大月刊誌

新企画がつぎつぎと登場します。

1—情操
キンダーブック
年中児向けの生活絵本です。季節感と創造力をたいせつに「心のやさしさ」を育てていきます。
(4月号 特別ふろく付) 団体購読価 月250円

キンダーおはなしえほん
年長児向けの本格的なお話絵本です。豊かな創造力と美しい心を育てます。
(上製本) 団体購読価 月300円

2—観察
キンダーブック
年長児向けの生活絵本です。観察力と遊びの心をポイントに、子どもたちの好奇心を高めます。
(4月号 特別ふろく付) 団体購読価 月250円

がくしゅうおおぞら
遊びながら楽しみながら、考える楽しさ、知る面白さが知らず知らずのうちに育っていく絵本です。
(母親向け別冊付) 団体購読価 月300円

しぜん—キンダーブック3
身近な昆虫や動植物など、自然界の不思議を正確で美しい絵や写真で感動的に紹介する科学絵本です。
(上製本) 団体購読価 月300円

ころころえほん
園生活で初めてふれる、年少児のための明るい絵本。幼ない子とのスキンシップが楽しめます。
(厚紙製本) 団体購読価 月250円

大判になり、増頁!!
キンダーメルヘン
年少・年中児向けのお話絵本で、幼児らしい夢を育てる楽しい絵本です。
団体購読価 月250円

保育専科・指導計画と指導の実際
4月号から本誌と指導計画との2本立て。保育資料豊富。定価据置き。別冊は年3回発行です。
定価400円 (別冊とも年間7,800円)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館